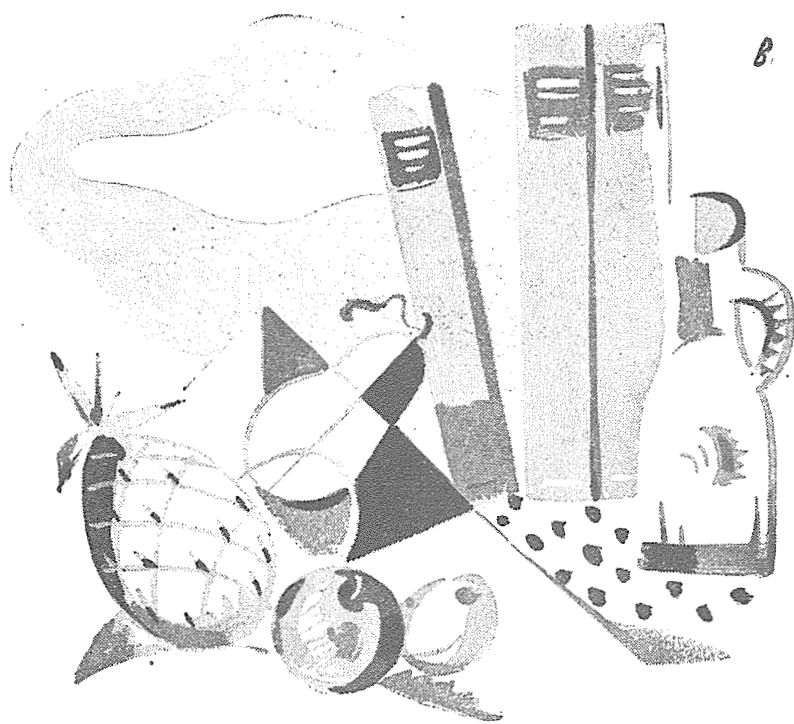


報學學大西哥

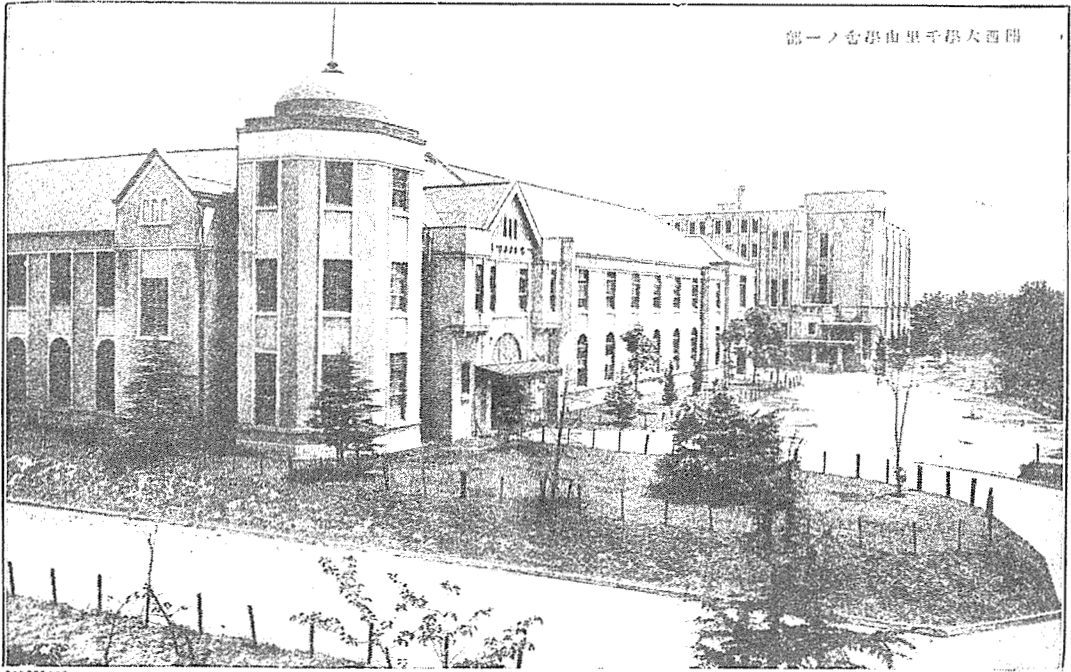
號十七百第

月六年四十和昭



行發局報學學大西關

部一ノ念學由里千學大西關

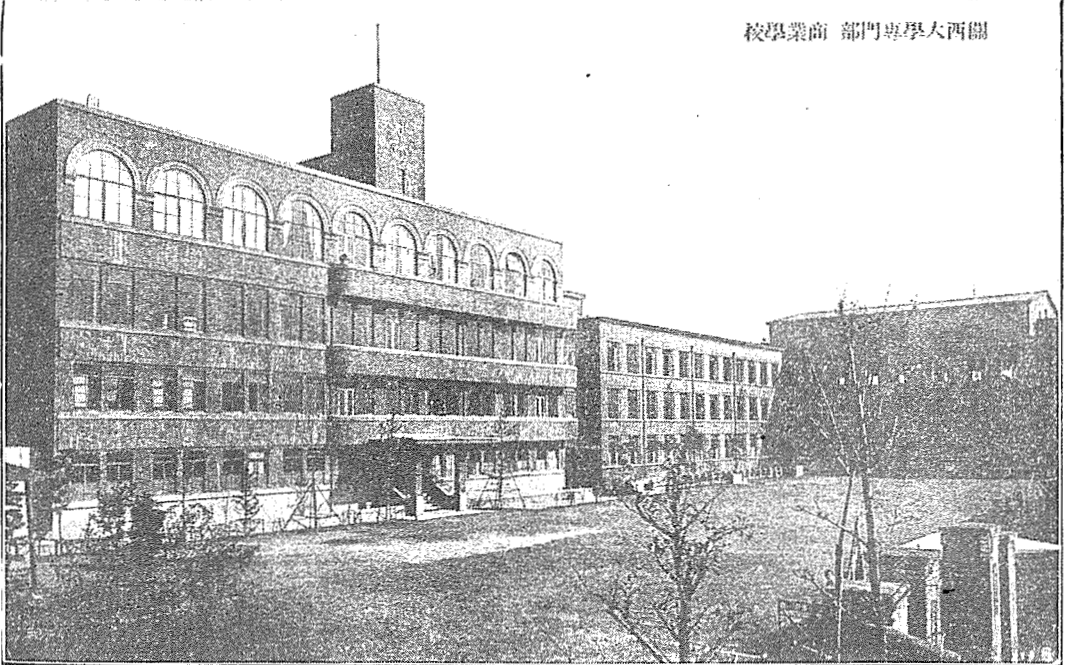


會學六天學本は方の望希ど
いさ下み込申御に課計會

組 一 枚 十
錢 十
錢 三 料 送

きがは校愛

校學業商 部門專學大西關



昭和十四年五月二十二日青少年學徒に賜はりたる

勅

語

謹載

國本ニ培ヒ國力ヲ養ヒ以テ國家隆昌ノ氣運ヲ
 永世ニ維持セムトスル任タル極メテ重ク道々
 ル甚ダ遠シ而シテ其ノ任實ニ繁リテ汝等青少
 年學徒ノ雙肩ニ在リ汝等其レ氣節ヲ尚ビ廉恥
 ヲ重ンジ古今ノ史實ニ稽ヘ中外ノ事勢ニ鑒ミ
 其ノ思索ヲ精ニシ其ノ識見ヲ長ジ執ル所中ヲ
 失ハズ濶ノ所正ヲ謬ラズ各其ノ本分ヲ恪守シ
 文ヲ修メ武ヲ練リ質實剛健ノ氣風ヲ振勵シ以
 テ負荷ノ大任ヲ全クセムコトヲ期セヨ

目次

昭和十四年五月二十二日	
青少年學徒に賜はりたる勅語……	(一)
青少年學徒への	
御勅語を拜して……神戸正雄……	(三)
光榮に輝く御親閲拜受……	(四)
愛國詩は呼ぶ……片岡甚太郎……	(八)
學内報……	(三)
勅語奉戴式「大阪護國神社集團勸行」與亞 青年勸業報國隊北支隊艦前「滿洲派遣」人 事異動「かくほう抄	
校友……	(一三)
校友會常務委員會「大阪支部」尾崎支部「大 連支部」神戸市役所關大クラブ「斯文會」 五線會「會員消息	
戦線だより……	(一四)
學生榮報……	(一八)
關大スポーツ……	(二二)
校友會費拂込者氏名(五)……	(二三)

青少年學徒への御勅語を拜して

學長
法學博士
神戸 正雄

茲に、陸軍現役將校學校配屬令、別の詞でいへば、軍事教練制の實施の十五周年を迎へて、其記念事業の一として、去五月二十二日、宮城前廣場にて全國の中等學校以上の學校の學生々徒代表三萬二千餘名の分列行進に對し、御親閱の式が行はれまして、本學々生々徒四十名も亦た此有難き光榮に浴し、私は學部長、學生々徒主事を帶同して此盛儀に參列するの榮譽を擔ひました。洵に恐懼感激に堪へない次第でありまして、私は此光榮を全學の同僚及學生々徒諸子にお願ひいたしたいと存じます。

當日に於ける 陛下の御英姿を仰ぎ奉り、參加學生々徒の勇ましき行進振りを視まして、更に其背後にある其に百倍する青少年の軍教を受けたる者の存在を想像しまして、大に心強さを感じ、國礎の不動を確信いたしました次第であります。

斯くして青少年學徒は御親閱を受くるだけでも、其光榮に感激したたのでありますのに、其上にも當日、勅語を戴きまして、一層の感激を受けました。我學園諸子も宜しく勅語の御趣旨を理解して、聖旨に副ひ奉ることを期しなければなりません。其處で私は御趣旨のある所を聊か分析して、解り易く説明して見やうと存じます。

私、恐れながら幾度か、勅語を拜讀いたしましたして、靜かに考へまするのに、勅語の中には二の大な筋が立つて居ります。第一は、青少年學徒の責任の自覺を御促しになつて居ること、第二は、青少年學徒が此自覺の下に、如何に行動すべきか、其方向を御示しになつて居るといふこと

であります。

第一に責任自覺の喚起に就きましては、勅語には、國家隆昌の氣運を永世に維持するの大任が青少年學徒の雙肩にありと仰せられて居ります洵に我國は今日まで隆々として進展して参りました。此氣運は必ずや永世に維持し、子孫に傳へなければなりません。其には青少年學徒が今よりして其大任を果すべき責任を自覺して、準備をして居なければならぬ而かも其責任や重く、且つ之を達するのは決して容易ではなく、前途遠慮である。並み々々の努力では出來ないのだといふことを御示しになつて居ります。

次に第二に、青少年學徒の行動の方向として御示しになつて居るのは私の拜察しました所では、二の事柄になります。其第一は、青少年の修業上の方針でありまして、第二は、其修養上、精神修養の上の方針であります。

第一の修業上の指針としましては、此が更に二點ありまして、其一は文を修めると共に、武を練るべしといふこととあります。此に此度の軍教實施記念事業の機會に賜はりたる勅語の中にあります詞としては特別の意味を有つてありまして、文を修めることは學徒としては當然に氣を付けることでありますが、其れだけではいけない。尙ほ武をも練れば文化生活に慣れ、文弱に流れる傾がありますので、之を御戒めになつたのであり、國民が文のみに耽つては、國危うしといふ御心配から出たものと存じます。此にて軍事教練に折角、力を入れよとの御思召と拜します。更には武道の修業にも力を入れ、體位向上をも心掛けて、其々の運動をも努めるやうに御注意のあつたものと存じます。

修業の上の第二の御注意は、古今の史實に稽へ、中外の事勢に鑒み、

思素を精にし、識見を長じよといふ御示しであります。此は近頃、人々が動もすれば、獨斷や、獨善に陥り、自分のみ良しとし、或は日本又は日本國民の美點を誇示して是れりとし、外國の事など學ぶに及ばずと考ふることになり勝でありますが、其はいかない。遠く過去の歴史を案じて治亂興亡の跡を探ぐり、又外國の優れたものを遠慮なく取入れ、採長補短を怠つてはならぬといふことを注意なされたものと存じます。更には深く事物の原理を究め、思素を怠らぬやうにし、廣く高い識見を備ふるやうにしなければならぬと仰せられて居り、學徒の陥り易き弊害を指摘して、其修學の上には、此上もなき指針を御示しになつて居るのであります。

第二の精神修養の上の方針として御示しになつて居るのは三つあります。其第一は分を守ること、第二は中正を把ること、第三は堅實な操守を有つことであります。

第一の分を守るといふのは、勅語には、各其本分を恪守しとありまして、其は各人、其本分、職分を大切にし、其に懸命になつて努力するといふことであります。學生は學生としての本分を守つて、懸命に其業を勵むべく、出でて社會人となつては、其々の職務、職業に懸命になつて勉勵する。軍務に服したときは、又其任務をば全力を擧げて果たすといふのであります。其が各人の務めであり、人が國家社會の一員として當然爲すべき役割に外なりませぬ。

第二の中正を把るといふことは、勅語には、執る所中を失はず、嚮ふ所正を謬らせずとあります。正を謬らせずとは、正しきを行ふことで、人が其良心に従ひ正義公道を行ふといふので、道義に従ふといふのに外ありませぬ。たゞ正しきを謬らぬといふのは、苟くも道義を重んずる者なれば誰れでも氣のつくことでありますが、其れだけでは、動もすれば極端

に陥り易い。其處で、今一つ、中を失はず、中庸を行けと仰せになつて穩健なる道を進むことを御示しになつたと拜されます。青少年の理想に憧憬する者は、往々にして一の方向を正しと信じて、其方ばかり注視することになります。が、あまりに其方ばかり見てはいけません。中庸を外れるなといふので、間違を生じないで済むことになるのであります。

第三の堅實なる操守を有つといふことは、勅語の中には、質實剛健の氣風を振勵しといふ詞と、氣節を尙び廉恥を重んじといふ詞と、二の御詞が前後に出て居ります。其は何れもつまり、堅い、しつかりとした氣概、氣骨を持つてといふことに歸します。質實剛健といひ氣節廉恥といふも、凡べて心の中にしつかりした操守があつて、何人にも動かされないことを示すものでありまして、外に現はれては華奢とならず、質素なる風容を成し、内は利慾に迷はされず、名利を追ふことなく、但し名を汚さないやうに、卑屈にもならず、堂々と世の爲め國の爲めに盡すべきを盡し、其も是れも名を求めたり、利益を計る爲めにするのでなく、爲すべきが故に敢然として爲すといふのでなくてはならぬといふのである。名を求めるといふのではないけれども、しかし名を汚してはならぬ。己のみならず、家門の名をも辱しめず、といふことを期しなければならぬといふのであります。此等は由來、武士の行くべき道として教へられたものであります。其は獨り武人としてのみでなく、一般人にとりても踏むべき道に外なりませぬ。勅語によりて、之をば庶民道としても尊重すべきことを御示しになりました。お互に今後一層此點に力を入れなければなりません。

勅語は實に時節柄、適切なる御注意を御示しになつたものでありまして、青少年學徒は勿論、私達、青少年指導の任にある者も共に眷々服膺して、聖旨に副ひ奉ることを期しませう。

千里山學園運動場に於ける歡送式に列し、學長代理中谷法文學部部長の歡送の辭を受け、勇躍出發の途につき又専門部職員生徒代表は翌二十日午前七時半天六學舎に於ける歡送式に列し、正井専門部長の歡送の辭を受け、學部豫科代表と合して校旗を先頭に歩武堂々校門を出發、午前九時二十分大阪驛發特別列車にて東上、學部學生は近衛歩兵第一聯隊、豫科及専門部生徒は近衛歩兵第三聯隊に宿泊、翌二十一日午後二時御親閱拜受豫行に參加、豫行終了後引續き御親閱拜受章授與式舉行され、大學を代表して神戸學長、大學豫科を代表して田邊教授、専門部を代表して矢口教授が夫れ夫れ參列した。又當日午後四時四十分より神田一ツ橋共立講堂に於て記念講演會が開催され、本學よりは加藤經商學部部長、田邊教授、山木生徒主事補、學部學生代表川上猷三、豫科生徒代表入田順雄、専門部生徒代表亦木哲英の諸氏が懇講した。

五月二十二日晴れの御親閱式終了後學部學生は靖國神社、豫科及専門部生徒は明治神宮に參拜し、同日午後十時五十分東京驛發特別列車にて離京、翌二十三日午前十時二十分大阪驛發歸來した。天六學舎では同十一時専門部代表の歸學式を、また、千里山學舎では午後零時半學部豫科代表の歸學式をそれぞれ厳肅に舉行した。左に學生生徒代表の謹記せる感想を掲載して御親閱拜受の光榮を永へに記念する。

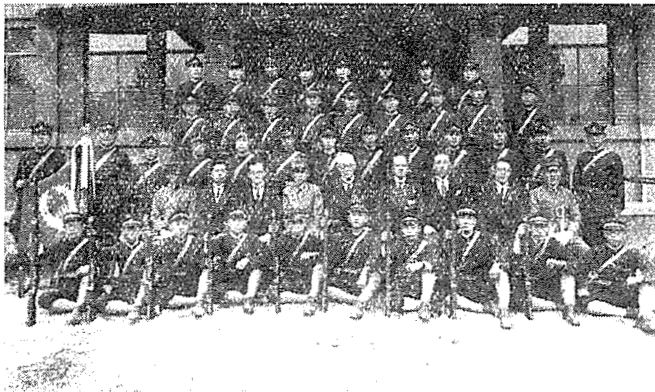
○ 經商學部商學學科第三學年 平野 茂
此度陸軍現役將校學校配屬令公布十五年記念に當り全國學生々徒の合同查閱の行はるゝに際し、畏くも天皇陛下には事變下御政務御多端にわたらせらるゝにも拘らせられず、御親閱を賜ひし事は、御聖旨の程を

拜察し、眞に恐懼感激に堪へず。

不肖私ははからずも光榮ある旗手を命ぜられ、全國大學々部學生を以て編成せられたる第一集團の先頭に在りて、榮譽に輝く御親閱拜受章を感く校旗を捧持し無上の光榮に感激せり。

五月の空の清く澄みわたり、新緑滿るばかりの大内山、玉砂利さへも今日の感激に打ちふるふかの如く、式場正面中央には白木の御親閱臺尊く拜さる。

畏くも 天皇陛下には錦旗鑲として輝く御乘馬國壽にて水清き二重橋を通御、式場に御親臨あらせらる。



御親閱參加職員學生生徒歸學の日 天六學舎本部前にて

蒼風に飄る錦旗輝く五月の明陽の下燦然と衆目を射て自ら頭の垂るを覺ゆ、全員捧げ銃の最敬禮。續いて荒木文相 御親閱を仰ぎ奉るの謹奏終るや、總指揮官の軍刀一閃、我々第一集團を先頭に九集團三萬二千餘名の學生部隊は純忠の赤誠を此の一刻にこめて今ぞ晴の分列行進に移る。光榮感激を此の一足に強く踏み占めて 大君の御前を進む。畏くも玉座の御前に近づくと頭有！ の號令。榮譽に感激の吾は玉砂利もくだけとばかり歩調を高め盡忠の誠を捧げ奉る。只敬虔嚴肅、仰げば畏くも龍顔を拜し奉る。感激の涙滂沱として頬を傳ひ、唯無我夢中にて大地を踏むのみ。

昭和の聖代に生き、多數の學生中より選拔され、御親閱拜受の光榮に浴し得たる吾々の榮譽感激終生忘るる事能はざる所にして、又現下の大國難を打破し、東亞新秩序建設の爲、吾々青年學生の責務の重且大なる事を自覺し、益々忠君愛國の念を固め、事變下の日本青年學生として粉骨碎身、御聖旨に應へ奉らんと決意を固む。

○ 法文學部法律學科第三學年 上山 晃

昭和十四年五月二十二日、戰時下日本學生生徒の意氣と熱とを宇内に顯揚した此の記念すべき御親閱の日を、興亞の大業を雙層に擔ふ我が青少年學生徒よ、永久に忘れてはならない。

此の日天候和やかに鼻月の空響く晴れて一片の雲なく、大内山の松の翠は千歳の色をたへ、祥雲九重の空に蹙蹙して瑞氣に充ち満ちたり。此の無上の光榮に限りなき感激に咽ぶ三萬五千餘の若人は、隊伍堂々宮城前廣場に整列、演刺たる緊張、士氣凜然として式場に漲る。

斯る時しも「君が代」の奏樂劇曉と起り、大内山に輝し瑞祥限りなし。恭しく拜し奉れば、天皇旗燦として旭日に輝き、畏くも、天皇陛下には御軍裝も御凛々しく御愛馬白雪に召され肅々として二重橋を通御、式場に着御あらせられた。ぐつと胸奥より迸り出づる盡忠の誠を此の一刻に捧げ奉る銃劍芝生の緑に映發す忽ち起る中山總指揮官の號令一下、晴れの分列行進は、我等第一集團より開始された。我等若人の感謝感激の血汐は、皇國日本の傳統的國是遂行の意氣に燃え歩武堂々と大地を踏みつけ踏みつけ進み行く、次第次第に、大君の御前に進む、中隊長の「頭右」の號令、嗚呼！此の時、大元帥陛下の御龍顔を仰ぎ奉れば、恐懼感激眼は感涙に霞み、我なく天地なく、宇宙の萬物皆大君に歸一融合し奉る神國日本の純一なる脉動と感激に浸るのみ。

颯て分列行進は終り荒木文部大臣、天皇陛下萬歳を唱へ奉れば全員拵舞して一齊に和し、其の聲鯨波となりて天を震はし、地を揺がす。唯有難きに感泣し、海行かば水漬く屍、山行かば草蒸す屍、大君の邊にこそ死なめと一死報國皇恩に報ひ奉らんものと心深く天地神明に誓ひ奉つたのであります。

時は將に肇國以來の重大時艱に際會して居ります。將來の日本を其の双肩に擔つて立たねばならぬ我々青少年學徒の任たるや洵に重く此の難局に善處して盤根錯節の世事を截斷し新に國力の發展を期し、以て曠古の天業を翼賛し奉るには御親閱拜受の限りなき感激をもつて緊禪一番、益々決意を強くし勉勵事に當り姑息偷安の弊風を一掃し實質剛建の氣風を振勵して、品性器能の玉成に勇往邁進全力を傾けて洪大なる、聖思の萬一に報ひ奉り、我が國威を四海に光被發揚しなけれ

ばならぬと心深く感じた次第であります。

○ 經商學部經濟學科第三學年 牧村 輝雄

五月十九日午後、出發の式を終りて高鳴る胸を休める暇もなく、明ければ五月二十日午前九時、初夏の薰風に送られて一路東京へと旅立つた。

車内で買ふ新聞にも御親閱の記事が掲載され、秩父宮殿下、閑院宮殿下、賀陽宮殿下、朝香宮殿下御台臨ある由記されて居る。我々は、天皇陛下御親臨、四殿下御台臨の下、綉羅星を飾る陪列、陪觀の文武顯官の前で御親閱を拜受するかと思へば一入感激を深くしたのである。富士の靈峰も喜ぶが如く又勵ますが如く我々を見て居る様に思へた。そして私達は自己が靜かな氣持にならうと務めてある矢先とて、その落着いた峰を見る時莊嚴な想念を深くした。それ故か車中にも無口になりがちだった。特別列車とて滑るが如く品川、新橋を経て東京驛着、市中を徒步行進して近衛第一聯隊第二中隊に到着宿泊す。

兵營生活、それも東の間、二十一日午前五時起床、豫行演習に参加した。明ければ二十二日！我々の一生忘れぬ事の出來ない二十二日だ。午前五時起床、暫時休憩して集合地第一聯隊營庭に集合し、直ちに宮城前廣場に急いだ。見よ五月の陽光燦とて輝く晴の朝！午前九時五十分捧げ銃の裡に君が代吹奏が始められた。御門を拜すると擦たる天皇旗捧持の近衛下士、横山侍從武官の御先導にて、天皇陛下には「白雪」に召され御英姿颯爽と御出御になつた。我々は一層緊張し手は感覚がなくなる程しつかりと銃を握つたのである。午前十時中山總指揮官の指揮刀一閃、湧き起る軍樂隊の行進曲と共に歴史的將又教育史上空前の盛事である大分列行進の幕は切つて落された。我々は足の踏

む處を知らないほど感激又感激、もう何もかも無我夢中だった。玉砂利を踏みしめる力強き靴音は美事に進行曲と一致してゐる。そして一絲亂れざる隊伍は整然又整然として、玉座の御前に向つて行進して行く。此の緊張した分列行進の折しも、學生聯盟機十二機が轟々たる爆音をとどろかせつゝ、飛來、大空から分列式に参加した。十五年の練武の成果は四十五分に亘つて繪巻の如く展開されたのである。その間、天皇陛下には各集團毎に御舉手を賜はりつゝ、玉座に立御あらせられた。眞に恐懼の至りである。分列式終るや文相の奉唱の下に力一杯、天皇陛下萬歳を三唱し奉つた。

天皇陛下には當日御親閱式の終了後畏くも青少年學徒に對し優渥なる御勅語を賜はつた。私共の胸奥には此の御勅語を奉體し事變下に於て一層文武を練ると共に一死君恩に奉ずる覺悟が深く刻まれた。そして我々學徒に與へられた大任を全うする様、一日一日を活かさうと決心しました。

○ 第二大學學科第二學年 入田 順雄

五月二十二日、此の日式場一帯は五月晴れの空に太陽燦として輝き、薰風は感激と興奮に高鳴る胸を心地好く吹き渡る絶好の御親閱日和でありました。御親閱拜受の光榮に浴する學徒三萬五千、嗚呼！！この光榮と感激、誰か天壤無窮の皇恩に感泣せざる者がありませうか。午前九時三十分諸般の準備完了、同四十分各隊一齊に抜刀着剣、緊張の氣場内に漲る。折柄響き互る「氣を付け」の喇叭。同十時、天皇陛下には陸軍御軍裝に大勲位副章を御佩用、御愛馬白雪に召され、天皇陛下を先頭に侍從武官横山騎兵中佐御先導にて陸軍戸山學校軍樂隊の「君が代」奏樂裡に二重橋前廣場中央御親閱台上の玉座に着御遊ばされ、軍樂奏でる中に全員最敬禮、武裝部隊は一齊に捧銃の禮を行へば、陛下

には畏くも御會釋を賜ふ。荒木文相は玉座前に進み、
謹んで御親閱を仰ぎ奉る旨を奏上、總指揮官中山少將
の前進命令の軍刀一閃、大學々部學生の第一集團第一
大隊を先頭に大分列行進が開始された。私達の屬する
第二集團第四大隊第十六中隊も中隊長の號令一下、軍
樂隊の奏でる音に歩調を合せて行進を起した。今ぞ榮
ある御親閱に私の胸は光榮と感激に無我夢中である。
「頭右ッ！」あゝ!!玉座に拜し奉る御英姿畏くも 天皇
陛下には御舉手賜ふ。龍顏を拜し奉る私の眼には滂
沱として感激の涙が湧き出で、五體は 天皇陛下の御
馬前に死するを得るの喜びに打震へたのであります。
隊伍堂々瞻影劍光一絲亂れず、銃後學徒の意氣颯爽と
靴音高き歩武堂々の行進が聖壽萬歳を壽ぎ奉るが如く
私には思へました。

私の心には最早や天地の區別なく、己れをすら意識
出来ませんでした。唯あるは「七生報國」の一念のみ!!
斯くて分列式を終るや荒木文相は玉座前に參進、天
皇陛下萬歳を奉唱、全員唱和の聲は天地に轟き渡る。續
いて荒木文相は行事終了の旨を奏上 陛下には天機隠
しく同十時四十五分全員最敬禮裡に還御あらせらる。
斯くて御親閱に參加し、恐れ多くも 龍顏を拜する
を得ましたことは恐懼感激に堪へないところであります。
又今回の御親閱の儀は深き 御敬慮に出でしもの
なりと洩れ承り、學生々徒に垂れさせ給ふ 聖慮の程
を拜察致しまして、恐懼感涙にむせぶのであります。

○ 専門部商業科第三學年 橋本 照

五月二十日 愈々上京の日来る。過ぎにし自重の一
ヶ月ノ學長先生初め諸先生方の御懇篤なる御訓示、御
注意に一層自重し、日々心身の健全に留意した。
躍り勝ちな胸を押へつゝ午前七時三十分、天六學舎
に集合、學部、豫科の代表三十名と合し武裝に身を固

め平尾大佐の引率の下に葦の葉鮮かな校旗を先頭に全
學生の歡送を受けつゝ感激の歩調で校門を出る。母校
の名譽の爲だしつかり頑張り。學友九百の代表なの
だ。と云ふ感じが強く胸を打つ。

午前九時二十分大阪驛發特別列車にて幾多學友に激
勵されつゝ他校の生徒と共に出發、一千の勇む心で座
席は埋つてしまふ。十二輛連結は大きくカーヴを畫き
つゝ緑の野を縫ひ、波打つ胸を東へ運ぶ。見渡す限りの
麥畑はピストンの吐息を吸ふ。濱松を過ぎた頃より
小雨も曇も消え果て鼻月の空は愈々澄み渡る。安倍川
面は陽光を碎き茶畑を前にする富士の美景、秀麗……
眞實の美に感服しつゝ午後七時半列車は東京に入る。
櫛内は銃と學生で埋つてしまつた。其れより留舎なる
近衛歩兵第三聯隊の營門をくぐる。

二十一日富城を脊にする赤坂台上に啾啾たるラッパ
の音は響き渡り兵營は突然朝の呼吸を始める。我等十
名も兵隊同様何事も規律正しくやつてのける。南京虫
に酒保に、麥飯に兵營生活は親しみを増して来る。豫
行の爲午前十一時二十分、代官町近衛歩兵第一聯隊に
集合すべく緑の香高き青葉の影を行進。營庭には全國
大學、高専の赤白紫……の校旗の波も勇しく、颯と整列
を終つて十列側面縱隊行進にて式場なる緑深き宮城前
廣場に進む、三萬一千の學徒は奉迎の位置に整列を終
了し、一時四十分豫行隊は軍樂隊の君が代吹奏裡に
到着、中山總指揮官の號令一下第一集團第一大隊を先
頭に分列行進開始、折柄の風に砂塵に包まれたが吾等
の強き歩調は亂れなかつた。

豫行演習の後引續き式場で御親閱拜受章授典式が行
はる。長時間の緊張で身體は疲勞を感じたが全學生の
眼は黒々と輝いてゐる。専門部豫科の二十名は歸營の
前時間の餘裕を靖國神社へ徒歩にて參拜す。……九段坂

霞につゞく靴の音……

午後五時四十分より神田一つ橋共立講堂にて記念講
演會が文部省陸海軍省の合同主催で開かる。荒木文相
板垣陸相、宇垣大將、松浦樞密顧問官の講演があり
各學校代表生徒一名づつ聴講せり。

二十二日 四時半起床、拂曉を流れ来る微風に心は
清められ、目前に迫つた御親閱拜受の光榮に勇み足も
軽く六時二十分兵營を出發、昨日の豫行通りの行程を
經て高鳴る胸を式場へ、空には一片の雲もなく、降り
そゞく陽光に青葉は輝く、九時四十分奉迎の準備は完
了、旗影劍光肅然として大内山は森嚴……莊嚴。

九時五十五分「君が代」の吹奏が身にしむ、天皇
陛下御親臨! 天皇旗燦として白雪に御乘馬の 御英
姿、ラッパ一聲全員肅然として「捧げ銃」!、日本人
と生れてこれ以上の感激が又とあらうか、颯と「前へ」
のラッパは鳴り渡り軍樂隊の勇壯なる行進曲に合し、
各隊次々と分列行進に入る。

犇々と迫り来る感激、力強く踏みしめる足、足、我
は今大君の御前に近づいて居るのだ。餘りの尊さに若
き血は燃ゆ、「頭右ッ!」 感激の甘嶋さ夢ではないこの
光榮! 迫り来る胸、熱い涙が滲んで玉座から離れる
に従つて前方は霞んで来る。生涯に忘れ得ない此の光
榮、一命を日本の爲に、大君の御爲に捧げようとの覺
悟を一層強くす、次いで三萬數千の至誠をこめた。天
皇陛下萬歳の聲は萬雷の如く五月の空を壓した。斯く
て御親閱式は終了し二大集團に分れて隊伍堂々市中を
行進を爲し明治神宮と靖國神社に參拜す。

今や聖戰は三年を経て東亞新秩序建設なる新段階に
入り、精神總動員の叫ばれて居る今日、此の意義深い
御親閱式を拜して吾等青年學徒としての使命の重大さ
を痛感したのである。

愛國詩は呼ぶ

——英國戰爭詩の一瞥——

教授 片岡甚太郎

「世界決戦史」で有名なエドワード・クリューズイ教授によると、世界の文化と歴史と政治とを決定した大戦争は、全部で十五であることになつてゐる。勿論、この著書は1925年に出版されてゐるので歐洲大戦はもとより、東亞の盟主としての日本の使命を決定した日露戦争(1904-5)は、此の中には挙げられてゐない。

さうして、どうしたことか近代庶民階級の獨立を促進したバーネット戦役(1791)をクリューズイは全然見落してゐる。今この十五の戦役を一々列挙するの煩はしさを避けたいけれども、その中にかく世界の動向に大きな影響を與へたものを拾つてみると、古いところではマラソン戦役(前490年)、シラクサ戦役(前480年)、アーベラ戦役(前381年)、メトラス役(前307年)、アーミニアス戦役(後20年)、トゥールズ役(後52年)を始めて、新しいところではバルトワ役(後1709年)、及びサラトガ戦役(後1777年)などがある。右の外、英國だけに關係のあるものには大陸のウイリアムが英國を征服したヘースチングス役(1066年)、西班牙の野望が潰滅に歸したアーマダ戦役(1588年)、佛蘭西王ルイ十四世の野心が英海軍によつて破棄せしめら

れたブレレンハイム戦役(1702年)及びナボレオンの敗北によつて全歐の佛領化を喰ひとめることの出来たワテルロー戦役(1794年)がある。

さて、戦争が愛國の至情を顯現することは、古今の歴史が明證するところである。英國のアルフレッド王がその散文の中でマラソン役の勝利者をシーシアスだとしてゐるのは誤謬であるけれども、その「年代記」の中ではヘースチングス役の哀話を努めて克明に描いてゐるし、また「モールドンの戦」、「ブルナンバールの戦」といふ二つの有名な歌謡を残してゐる。シラクサ戦役から取材したものはリチャード・エドワーズの「ダモンとビシアス」があり、アーミニアス役から取材した古代英語時代の國民叙事詩は多数に上つてゐる。ヘースチングス役については「ロリアッド」といふ諷刺作があり、また當時のドイツ人の侵入に對しては國民の愛國心を鼓舞する民謡が發出したことはマームズベリーの「テインチエス・フレイ役」に見えてゐる。次のブレレンハイム役については、アデイソンの「戦役」、ジョン・ワイリッパの「ブレレンハイム」の二作があり、アーマダ役についてはグリートの「オーランド・ヒュエリオソ」が出て、國民の英國史に對する興味を

喚起したことは比較的新しい事實である。サミュエル・ダニエルの「内亂史」の出したのも此の頃のことである。最後にワテルロー戦役に關する國民の愛國熱は種々の文獻として残されてゐる。すなはちジョージ・グレイグの「ウォータール海戦物語」は、トラファルガー海戦に於けるネルソンの如く、此の海戦のウエリントンに激賞したものであり、またゼームズ・キヤットナクの「ウォータール海戦」といふ歌謡は、當時の赤本として恐ろしい賣行を示したことが記録に見えてゐるが、結果に於て國民の愛國心を湧き立たせてゐる事實を見逃がすことは出来ない。因みに我國の東郷元帥に比せられるネルソンは、ロバート・サウジの「ネルソン傳」の流麗瑣々たる行文を通して我々の腦裡に深く印象づけられてゐる。

二

戦争詩は、常に必ずしも愛國詩ではないことは首肯に難くないであらう。このことは特に歐洲大戦以後の詩について云へることであらうと思ふ。これは人類が大戦によつて反省的・消極的になつた一つの證左であつて、決して古くからの現象ではないのである。たとへば古謡「サー・アルデザインガー」の女主人公は「男ならば戰場に立つものを」と叫んで居り、同じく「エストミア王」の一人の若い女性が西班牙王との抗戦を主張してゐるし、その他「ロビン・フッド」、「オックス・バーン役」、「サー・アンドルー・バートン」等の民謡にしても凡て勇壯無比な武人の氣概が盛られてゐる。古謡から眼を轉じて、一般に暗笑された戦争詩を眺めるならば、そこにはどのやうな場面が展開するであ

らうか。先づ第一に念頭に浮ぶのは、「わが船が港を出るとき、風は佛軍に味方せり」の句で始まつてゐるマイクル・ドレイトンの「アデンクールの戦」である。これは百年戦争の時英王ヘンリー五世が佛軍をアデンクールに撃滅してその貴族の勢力を制奪した戦争であつたが、この戦でヘンリーが（たとへ敵の軍勢が、われに十倍するとても、われ何んぞ驚かん。……この戦さこそは我が永遠の癒ひの場所ぞ、死して護るわが英國ぞ」と絶叫してゐる第四節第五節あたりには、これが皇帝の叫びであるだけに一入勇壯な響きを與へる。歌詞の中にも織り込まれてゐる通り、ヨーク公・エドワード・クラレンス・ウオリックの諸侯も凡て鮮血にまみれて奮戦したのであつた。詩形はバラッド風な簡易な韻律の八行一聯の詩である。第二に誰もが思ひ出すのはキャヴァリア詩人の一人であるリチャード・ラヴレースの「征途に立ちてルカスタへ」と「海を渡りてルカスタへ」の二聯の抒情詩であらう。前者は、「出でたち征くわれを、不信と思ふな我こそは……戦の庭の劍馬と盾を、わが新しき戀人として」と歌ひ出して居り、後者は、「遙けき海を隔つれど……先の世に望みを懸けて、汝の眼とわが眼の、み空にて瞬く日もあらん」と結んでゐる。こゝでは勿論、戦争が中世的にあまりにも抒情化されて居り、遊藝化されてゐて、我々がこゝでそれらを正面から取り組むべき戦争詩でないことは論を俟たない。第三にトーマス・キヤムベルの「バルチッタの戦」がある。彼は同じく戦争詩の「ホーヘンリンデン」及び「英國の船乗」の作者である。「英國の船乗」では、キヤムベルは、今新しく海戦に出る英國海軍を波止場に送るに際して、千

古の海上権を確保した波等の祖先の血と肉とが、海濱に打ち寄せてゐる波浪と漣の一つ一つに刻まれてゐることから説き起し、永遠に眠るブレイク提督とネルソンを弔つて居り、「ホーヘンリンデン」に於ては、祖國の問題を離れて佛領戦争（1800年）に取材し、一方ではモロー將軍の軍勢が、そして他方では埃軍が對峙して、未だ何もの汚れを知らない白晳々の山野をさし挟んでゐ、騎虎の一撃で、勇ましき者よ、頭上には、榮光か、否らずば墓地の俵といふ激戦直前の無氣味さを歌ひ、それが直ちに生き別れるものゝ、黙して、なべて地下に會するものぞ、と悲壯に結んでゐるあたり、現在までの戦争詩の白眉である所以が領かれる。因に、この詩はわが國の英語教科書に屢々取り入れられてゐる。「バルチッタの戦」は、ネルソンが1801年にエルジノアの沖合でエリツ軍を撃滅した模様を歌つたものであるが、最後の一節で、

戦勝に 杯照り光れども、
その歡喜の 怒濤の中に、
想ひ起せよ 勇士眠れる
エルジノアの 沖には……

今もなほ 嵐の立つ。

これと略々同じ時代のエバネサ・エリオットといふ人に、「戦の唄」といふ作がある。これはアッチラの率ゐる匈奴軍が、羅馬軍に破られるシャロン役（41年）を扱つたものであるが、この戦争は歐羅巴が亞細亞人の侵入を防ぎその潰滅を免かれた點で、前述クリーズ

イ教授が、世界決戦の一つに數へてゐるところである。エリオットが此の詩の中で、刺し殺されて行く敵兵の背に

劫穴の如く 敵兵の足跡に
神の破邪の 劍はきらめく！

と、辛辣な惡罵を投げつけてゐるところに、我々が亞細亞人なるが故に、一擧の同情の涙があると共に、神がつねに我々に味方するためには、戦は勝たねばならないことを、此處でも銘記させられる。

三

歴史の上に殘されてゐる主もたつた英詩の戦争に關係のあるものは、略々以上で盡きてゐると思ふけれども、それが直接現代の事となつて來ると、問題はいかやうに簡單には片着けられない。今こゝで英詩の解釋を試みるのではないから、深く立ち入つたことは避けるけれども、現代の愛國詩を考へる場合、我々はどうしても二人の戦争詩人ウイルフレッド・オーウェンとジョージ・メリド・サストンの名を掲げなければならぬであらう。サストンは軍人としての功績により「戦功十字勳章」を授與されてゐ、その愛國の至情には變化はなかつたが、大戦末期より戦争の罪過を避けるために平和の促進を希求するに至つた人であり、オーウェンは、元來病弱であつたのにも關はず大戦勃發と共に參戰し、従軍中サストン等と相知るに至り、砲弾下の餘暇を契りて詩作に従事したが、休戦の一週間前に敵弾に斃れた人である。この二人は、大戦が英詩に及ぼした影響を知る上に、重大な契機を提供してゐるのであるけれども、此處で大切なことは、この二詩人が

ともに軍人であり、戦争の體驗者であることである。すなはち當時は、大戦遂行中であつたにも拘はらず、英國の思想界は、従つて詩壇は、いはゆるジョージアン時代の浪漫主義に濃く彩られてゐて、戦争を歌ふものも、或はそれをたゞ單に一つの浪漫主義的理想として粉飾してゐるに過ぎないか、或は逆に戦争の災禍を誇張して現實をどこまでも逃避しようとしたかの何れかであつて、良かれ悪しかれ現實に雄々しく直面して行つた詩人は、前記の二人に過ぎ無かつたからである。

例へば一般に戦争詩人と目されてゐるルーバート・ブルック、ジョン・フリーマン、W・ホッヂソン、ハーバート・アスキス、ジュリアン・グレンフェル、J・E・フレツカー、ローレンス・ビニオン等は、いたく戦争を理想化してゐるし、これに反してD・W・テナントとかフランシス・ルードウイツヂとかは、その恐怖を描くに急にして積極的な闘争精神を缺如してゐる。僅かに戦前より活動を續けてゐたW・ギブソンが戦争を正視し得たのと、ロバート・ニコルズが此の二つの詩的態度を折衷せしめることによつて詩を貧困より救ひ出してゐたのが異彩であつたのに過ぎ無かつた。

英國の詩人達が、自國の運命が根柢から揺がうとしてゐたのにも拘はらず、英詩がかくまで愛國の一色に塗り潰され得なかつたことは、國柄がその最大の原因ではあつたけれども、直接には、詩の傳統を強く掌握してゐた思想的背景の問題であつたことを見逃がしてはならない。即ち戦前にはニーチェの反基督教的權力主義とか、シヨーとかファアビアン黨員の社會改革主義とかによる社會の連帶責任が強調されるに至つて過去の浪漫主義の幻影が、完全に葬り去られようとしてゐ

たが、偶々大戦の劫火によつて、再び思想的根柢が二分し、一つはフロイドの心理主義による文學上の無責任主義と浪漫主義の復活となり、一つは災禍による社會意識の昂揚・闘争による權力の確立となつて行つたのであつた。詩が自己の權威を確立するためには、當時の散文主義に打ち勝つためにも後者にはなく、前者に媚を求めめる方が、より廣い門であつたことは想像に難くはないであらう。

四

さてこの錯雜した詩の傳統の中にあつて、とにかく傾向の顯著なものから、戦争詩の主なものを持つてみるならば、浪漫派ブルックの「軍人」がある。「われ若し死なば外つ國の、戦野の偶に一塊の、祖國のあるを知り給へ」といふ抑揚格五脚韻のなだらかな詩形で描かれてゐる。同じくビニオンの「英靈に捧ぐ」では、「若人は眼高らかに征地にゆけり、四肢運ましく眼光は澄み、群がる軍勢に怯まず衝けば、敵に顔して斃れたり」と、母國の愛し兒の最後を稱へ、

くに入るもの老いゆけど
彼等は老いず、年月と、もに
朽つることなし。日の沈み
陽の起ること

勳は我等の胸に在り……

と、烈々たる追憶の念の抑へ難いものゝ在ることを訴へてゐる。ビニオンにはまた「勇士夫人へ」といふ遊家族婦人の徳を稱へた熱烈な愛國詩のあることを忘れてはならない。次に矢張り同様に浪漫主義者であつた

が、フレツカーは大戦中に病死してゐるので大戦を直接歌つたものはないが、近東に住んでゐる關係から「サラセンの戦争詩」がある。これは古くは羅馬人を、そして後には凡ての基督教國、特に十字軍を執拗に憐ましたサラセン民族の根強さを稱へた詩であつて、彼等が常に、「陽の沈みゆく國の、蒼白き王共よ」と、西域の文明諸國を睥睨しながら、氣概の營るべからざるころのあつたことを採り上げて、彼等が

斃れた者は 砂漠の餌だ
勝利の榮光こそ 我等の歌だ!

といふ彼等の勇氣を激賞したものである。この詩と思ひ合されるのはG・K・チエスタトンの「レバント」である。これは十字軍が土耳古人に破れたレバント一役を歌つたバラッドとして有名である。此の外フリーマン、W・ホヂソン、アスキス、グレンフェル等の愛國詩なども、その浪漫的傾向のためにこゝで比較すべきであらうけれども省筆するとして、もつと直接に戦争に關係のあるアラン・スイーチャーの「死と共に囁きぬ」を取り上げるべきであらう。「私は、死と共に私語いた、場所は名のある障壁地……」といふ抑揚格五脚韻の六行・八行・十行の三節からなる此の短詩では、

やがて死が 訪れて來て
かそけき國に 連れて行かう
……………

世は再び春 花咲けど……
われはこの囁きの言葉守らん。

と云つて情緒の澄んだ抒情調が、淀みなく流れてゐる愛誦すべき詩であると思ふ。またジョン・マツクリー

に「フランダーズの戰場」といふ短詩があるが、彼は
大戦中軍醫として従軍してゐるので、その詩には類の
多い適遊さがあり、

フランダーの戰場に 粟は咬き

戦友の眠る 十字架を縫ふ……

地上に崩かず 砲陣は揺ぐ

といふ歌ひ出しから、連綿として地下に眠る友の遺志
の空しからざらんことを切々として祈つてゐるのが我
々の耳朶に殘る。この作には最早や、浪漫的な理想主
義は姿を消して、現實直視の力強い詩の使命が犇々と
感ぜられる。たゞ此の戦争の直視は勳もすれば、その
恐怖に怯えて逃避の傾向に墮落する恐れのあることが
注意されるべきであらう。例へば同じく戦争の腥さを抉
出してもテナントの「ラウエンテイに家郷を想ふ」と
か、ルードウィツチの「軍法會議」、「最後の詩集」とか
に見える詩風がそれであつて、前述のギブソンとかニ
ホルズの詩風の如く、戦争の生む事態への一つの感傷
に終つてしまふ危険が多分にあるのである。

五

スイーデヤ、マックリーに見る積極的克服の詩的
態度が、更に明瞭に表出されてゐるのが、オーウエン
とサースンの戦争詩である。サースンは「老いたる獵
人」、「遺襲」、「映畫興行」などのために知られ、戦
争の生んだ事態を直視してゐる點で、彼が戦争の詩人
であると同時に平和の詩人である面目が躍如としてゐ
る。彼は「救世主」の中では將兵を基督に稽へ、「勞
働隊」に於ては、たゞ寡黙實行の軍人を描き、「戦争
の歌」では戦争が済んで國民の愛國熱の冷めることを
杞憂してゐるが、その語調は辛辣肺腑を抉るものがあ

る。だが一般に世人に愛誦せられてゐるものは

われ神を 戦に見たり

急ぎ彼地に 赴かん

生還の 望みは薄く

狂怒の 空を撃つところ。

と歌つてゐる「神祕の兵士」とか、また休戦の高鳴る

響きに疲れた英國がはつと吐息をついた瞬間の歎びを

われ感涙に 咽ぶ

恐怖は 世より消え行かん

小鳥のごと……言葉の盡さぬ

喜びは 永遠に地に溢る。

と結んでゐる「諸人は欲ひぬ」などである。

人間性を克明に拉致しようとして英詩に新しい息吹
きを取り戻したオーウエンは、戦争詩人としてもサス
ーンに一步地を抜いてゐることは、今日一般に認めら
れてゐるところである。「空虚」にしても「來るべき
戦争」、「優しき亡霊」、「火坑兵」にしても、サースン
に見受けられない感情のゆとりと包容性と深刻さと遠
觀とが底を流れてゐる。ダンテ的な死の幻影を描いた
短詩「奇遇」では、敵味方ともに同じ草場に群れ伏して

われこそは 汝の彈丸に

斃れしものぞ おゝ友よ、

今こそは 共に眠らん……

と痛哭せしめて、人類の運命に聖涙を注いでゐる。愛

を越え、感傷を克服して、負傷に緒切れてゆく戦友に

紅せる唇も 覆せて見ゆ

同胞の染めし 鮮血の岩

われに代りし 汝の眼差し

色消えて……

彈丸に眼れし 汝が胸。

と、高らかに涙を叩つてゐても、彼の絶唱には虚空が
無い。此の引用は「大いなる愛」の一節である。戦争

が悲劇だなどと考へてゐる間は、まだ人生が解つてゐ
ないのである。

細り行き 濡れ行く頭髪の

濕地の土と 見堺ひのなく

霜なす草に 化するとも……

誰ぞ知る 誰ぞ望む 誰ぞ苦しむ。

たゞ凝視せよ……

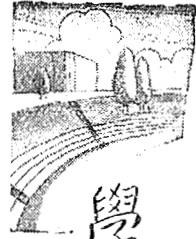
彼は眠れども 醒めある我等より

大きく知らしめずものを！

六

これはオーウエンの戦争詩の最後の斷章である。

オーウエンの詩を誦して、偶々現代群小作家の戦争
詩に眼を轉じてみるならば、其處にはあまりにも索漠
たる感傷と、甘き憎悪と、自由主義者達の哀しい白日
夢とに我々は思はず一驚を喫するであらう。B・A・ロ
ビンソンの「暗き丘」、W・S・コールの「戦時の風景」
C・ガーストメアの「凡ての勇者」、J・H・ピーンの
「フランダーの野」、B・D・リーチの「十一月十一日」
などは、たゞ感情の熾烈さを缺くに留まつてゐるけれ
ども、その外に散見するC・アーサーの「戦の化身」、
I・アンハートの「若き兵士」、I・C・クリマーの
「忘却」などは何等の詩としての感激を盛つてゐないの
である。我々は更に眼をアメリカ大陸に轉じて、その
對英戦争、南北戦争の生んだ愛國詩を一瞥する必要が
あるであらう。そしてまた既に世人の注目を惹いてゐ
るレンの「戦争」、レマルクの「西部戦線」、カロツサ
の「ルーマニア日記」、シエリフの「旅の終り」とか
の散文の戦争文學と比較すると、我國の多くの戦史
とか「維新志士の勤王詩歌」とか、近くは「麥と兵隊」
愛國歌謡、その他の戦争文學にも何れほどかの言及を
なすべきであつたかも知れないが割愛する。



學内報

勅語奉戴式

五月二十二日陸軍現役將校學校配屬令實施十五年記念全國學生徒御親臨式當日下し賜はれる 勅語奉戴式を、學部及豫科は六月七日午前十一時四十分より千里山豫科講堂に於て、専門部一部は同十四日午前十時三十分より、専門部二部は同日午後六時より教職員、學生生徒全員出席嚴肅に舉行した。國歌合唱、皇居遙拜について、戦歿將士の英靈に衷心よりの感謝と出征將士の武運長久を祈願する黙禱を行ひたる後、神戸學長謹んで 勅語を奉讀し、聖旨を奉體して學生生徒に訓諭された。

大阪護國神社

集團勤行

大阪護國神社の創設さるゝに當り、同社境域整備作業は府民の勤勞奉仕を以て着々進捗中であるが、本學は學生をして至誠以て勞力奉仕を爲し、孜々役々の中に殉國將士の忠勇義烈を偲び、非常時學生生徒の覺悟と強靱なる體力を養成し、國民精神總動員の實を擧ぐる爲、大學豫科は去る六月八日之を實施し、學部は六月二十四日、専門部は近く實施する豫定である。

興亞青年勤勞報國隊

北支・蒙疆並に滿洲派遣

東亞新秩序の建設に青年の大陸認識とその實踐的奉公とに俟つこと大なるものあるに鑑み、文部省にては一般青年並に學生生徒を大陸に派遣し、現地に於ける國防建設、文化工作並に内地に於ける農業生産擴充計畫遂行上必要なる飼料の生産等を行はしめ、之等の集團的勤勞訓練を通じて興亞精神を體得せしむると共に直接建設の事業に協力せしむる爲、興亞青年勤勞報國隊組織し、本年夏期（自七月下旬至八月下旬一ヶ月）間北支・蒙疆並に滿洲に派遣さるゝを以て、本學よりは左の通り參加することとなつた。

法文學部

指導教官

學生主事補步兵大尉

中野 勝

樺島 明

中平 富雄

大澤 忠之進

得丸 正雄

桑島 良信

北川 喜久雄

下原 太郎

吉田 八郎

川上 猷三

經濟學部

指導教官

教授

中村 良之助

小前 典夫

佐藤 尚史

鈴木 正夫

石井 誠

苗村 徳五郎

稻森 道彦

竹島 武男

美浦 秀雄

西谷 輝久

松下 雅良

滿 洲 派 遣

大學豫科

指導教官

教授

河村 信一

鎌田 貞三

東原 和夫

藤水 國隆

渡邊 喜弘

山元 一之

專門部第一部

指導教官

木原 武男

康 順 和

島中 和一郎

稻葉 通春

村田 旭

人事異動

囑任講師（六月八日付）

大平 頼母

臨時教職補助兼生徒主事補（五月二十日付）

同

步兵少尉 川崎 榮太郎

同

講師 小川 裕人

同

講師 富山 四郎

同

講師 山崎 直樹

かくほう抄

木村教授 日本諸學振興委員會昭和十四年度法學部臨時委員を委嘱さる。

河村宜教授 五月二十七、八日京都帝大經濟學部創立二十年記念經濟學會大會出席「布哇に於ける本邦移民について」と題し研究發表あり。

磯部教授 新刊「中小商工業の組合運動」を大阪甲交堂より發行した。

井上隆證講師 京都市上京區相國寺東門前町北ノ部に轉居

高田彬講師 神戸市灘區篠原本町二ノ二〇一に轉居

〔正誤訂正〕 本誌前號（一六九號）一〇頁「武田宣英博士和氣清隆呂公泰神教國寄贈」記事「御物の御貸下を願ひ」とあるは「御物模寫の御許可を得御物の寫眞まで御貸與を贈はり」と謹んで訂正します。

校友

校友會常議員會

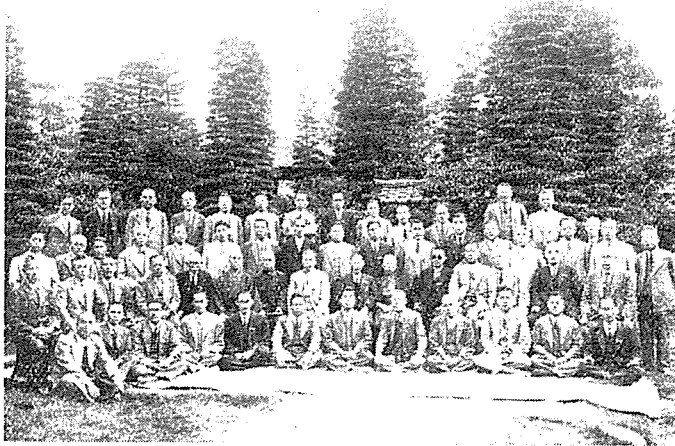
校友會常議員會は六月十四日午後六時より天六學會會議室に於て開催した。岩崎幹事開會の辭を述べ、神戸會長の挨拶ありて議事に入り、會期第二十二條による鹿兒島、高知、石川、齊々哈爾、青島、京都、尼崎各支部の承認の件並に昭和十三年度收支決算の件を可決し、本年度總會其他本會事業につき意見を交換し午後九時散會した。

出席者
 神戸正雄 岩崎卯一 魚羽源四郎 桂忠雄 河村寛介 櫻本信雄 神屋敷民藏 松本茂三郎 南清 森川太郎 角田好太郎

大阪支部春季懇親會

恒例の春季懇親會は五月二十八日(日)舉行、時局に相適しく伊勢琴宮を爲す。當日午前九時會員九十名、大軌上六驛發琴急電鐵特別車にて宇治山田に向ふ。車中和氣談笑の中に午前十一時過宇治山田驛着、この日天氣晴朗、神苑の氣嚴かに充ちたる中を襟を正して外宮内宮参拜、五十鈴の清水に心を清めて神前に額き、國威宣揚、皇軍將士の武運長久の祈願をなす。それより内宮前對泉閣に至り葎食、午後四時開宴迄の間各自新緑の神部に思ひ／＼の遊覧をなし、午後四時宴會場「千秋樓」に参集、宴に先立ちて庭前にて一同記念撮影四時半開宴。喜多村支部長より挨拶並に十三年度會計

報告をなし、更に會費月八十錢を一圓に値上げの件附議満場異議なく賛成、打蕩ぎて獻酬數時、和氣ブイアイ盛會裡に七時半散會せり。



大阪支部春季懇親會

出席者
 今田 光匡 飯田 清藏 一海 景吉 生島 藤藏 島田繁太郎 馬場 弘道 橋本 鹿藏 八島 治一

尼崎支部

支部役員會を去る五月二十五日午後六時より尼崎市西木町北通三丁目尼崎信用組合ビルに於て開催、幹事申より幹事長、會計幹事、當任幹事を選任し、本會事務所を決定したる外、將來本會の強化發展對策を協議打合せをなし午後九時散會した。

支部長、副支部長、顧問、幹事は前號學報に發表したる處なるを以て、左に當夜決定の役員を掲ぐ。

- | | | | |
|--------|-------|--------|-------|
| 丹羽宇三郎 | 西本 寛一 | 木田 武藏 | 富田金三郎 |
| 榎本 浩藏 | 島羽源四郎 | 富田伸次郎 | 富田 貞男 |
| 大崎萬太郎 | 岡本 義男 | 尾崎 鶴男 | 海北 和村 |
| 桂 忠雄 | 河村 宜介 | 粕元 幸治 | 吉村 種藏 |
| 吉田 音松 | 吉木 留喜 | 吉田 一枝 | 武田貞之助 |
| 玉木 三郎 | 田邊 清市 | 高松長左衛門 | 田中 可長 |
| 田所 留三 | 丹 二良 | 谷岡 登 | 竹西 輝雄 |
| 田中 健三 | 高沖 次郎 | 辻本 幸臣 | 永田 眞雄 |
| 内藤 正剛 | 中山 幸市 | 中塚 竹藏 | 永井 量一 |
| 中村良之助 | 中屋房太郎 | 名田 京一 | 村松 岩吉 |
| 浦田 豊 | 梅原貞治郎 | 植田 完治 | 内田 蕊 |
| 歌橋 千秋 | 野崎勇二郎 | 野口政治郎 | 野中 轍 |
| 黒田莊次郎 | 鞍貫 宣 | 山根 瀧藏 | 山野 巖 |
| 山崎 敬義 | 松本標四郎 | 松本茂三郎 | 松本芳太郎 |
| 前田 常好 | 松原 健一 | 松本 靜史 | 藤原 光治 |
| 小泉 幸治 | 兒玉 善吉 | 後藤田徳太郎 | 近藤 友房 |
| 渥美元次郎 | 赤羽豊治郎 | 阿部 甚吉 | 佐伯 三郎 |
| 喜多村桂一郎 | 木村順次郎 | 岸本 芳夫 | 木田秀太郎 |
| 三浦 三郎 | 水谷 撥一 | 三島 律夫 | 南 清 |
| 正田 麻治 | 志野覺治郎 | 堀野 秀春 | 森下龜太郎 |
| 森内 梅吉 | 鈴木 武夫 | 以上 | 九〇名 |

幹事長 大谷 盛光 會計幹事 飯田 幸一
 常任幹事 天野 平一 常任幹事 笠井 芳造
 同(會計幹事) 本家 喜一 同 多久和真三郎
 同 黒田健次郎
 支部事務所 尾崎市西本町北通三丁目尾崎信用組合
 ビル内

高當日の出席者
 松尾 高一 大谷 盛光 小村 雅彦 内田 政一
 天野 幸一 岡久 富吉 天崎 孝圓 笠井 芳造
 大島 賢三 齋藤 太輔 多久和真三郎 長谷 正事
 森川 太郎 吉村謙治郎 (以上 十四名)

大連支部

四月廿日午後七時より、寺内通海務協會食堂に於て秀麗會第卅六回例會を開催すいつも時間に遅れたことのない高濱居士が一向に姿を見せぬので電話をかけて見ると、家は早く出ましたとのこと、はてさて探して見ると道は何処に娛樂室で秀島氏と烏鸚戦の真最中だ高濱居士を待つてみた積りのものが實は待たれてゐたことが判明一同定席に着けば近來にない喜ばしい珍現象を展開してゐる。それは老頭兒連中が没落して新しい若い者達が激増擡頭して來たことだ、今晚老頭兒と云へば、高濱先生位のものだと云へば悪い晩に來たものだと高濱さん頭を掻くが口は中々違者だ隣近所は當り散らさるるが中々愉快なものだ平井君立つて、今晚出席の新人を紹介すれば、先づ就職とお嫁さんと同時に獲得した武笠君滿洲への抱負と秀麗會への關心の程を吐露し、詳しくは調査中だと自己の職業の楯に隠れ次で安達君、大連上陸第一歩の印象にぶら下がつて

夢と現實のギャップの中から自己を見出し自己を育て滿洲に生きんと雄辯を以てまくしたてる、次は北條君日本人の優越觀に痛棒を加へて暗に校友先輩も叱られた恰好となり最後に佐藤君立つて一年間皆勤した秀麗會に對する感想としばらく兵隊に行き歸連後は新京に轉勤する豫定なればと、別れの挨拶を述べ更に新京に於ける覺悟の程を表明し校友一同も確りやつてくれと希望し實に和氣霽々として盡るなく話はそれからそれへと涯もなく續き愉快なる幾時間を一瞬の如くに過ぎ九時半學歌を高唱して散會
 當日の出席者
 高濱直一 秀島全治 萩原博 結城丙太 加來茂彦
 李鴻年 佐藤丈夫 北條茂義 辻菊雄 九門士藏
 武笠幹雄 安達竹七 平井三朗

神戸市役所關大俱樂部 春季總會の記

新緑滿る五月二十三日午後五時より馴染深き神戸驛前加藤館に於て本年度春季總會を開催、此度は殊に仁禮、友成、山本(寛三)氏の主事榮進祝賀やら、南支より赫々たる武勳を樹て、歸還した山本克巳君、初年兵教育を終へて除隊になつた石田君外に新入會員八名の歡迎やらを兼ねたので、集る者特別會員五十川直市氏小西會長以下四十二名の多きに遊し、本會始つて以來の盛會であつた。先づ藤野幹事開會の辭ありて大西幹事進行係に推舉せられ、皇軍の武運長久と護國の英靈に對する默禱の後、會長及五十川顧問の挨拶、並びに祝辭あり、仁禮副會長は新主事を代表して之に應へ、更に山本(克)、石田兩君簡單に歸還の報告を爲し、續

戦線だより

南支戦線にて

孫科教務課 若松新吾

拜後初夏の砌御一同には御壯健にて校務御精勵の御事乍臨御喜び申し上げます。本日は御情籠る結構なる慰問品と御親切なる御激勵と御慰問の言葉賜り何時に變らぬ皆様の温き御心情に胸の迫る思ひが致しました遠く母國を離れて居ります者にこれ以上の喜びはございません。有難く厚く御禮申し上げます。日頃多忙を口實に御沙汰勝ちで失禮致して居ります。出征以來の詳しい行動を報告致します責任は重々承知致して居りますが、軍律により且又防牒上音信する事は絶對に禁止されて居りますので此點不慮らず御了承被下る様御願申上げます。次に申上げる事も軍律に許さるゝ範圍で書く事とて解し兼ねる點ばかりと恐縮致します皆様に盛んな御見送りを忝ふしまして大雨の中を出發しましてから數ヶ月猛訓練に錬磨されて南支へ皇軍第一歩のバイアス灣の敵前上陸に参加するの榮譽を得ました。空陸海協同で見事に一絲亂れぬ上陸振り、皇軍ならでは成し得ない盛業でせう。此體驗こそ私一生の寶でございます。上陸以來晝夜兼行日ならずして廣東に着きまして今日迄幸運にも健康に恵まれて、我部隊と共に戦場に宣撫に尙足らぬ活動を續けまして日々其の功の顯れつゝあります事は、上御一人の御稜威の致す處で御喜びに堪へません。此間私は何の勳も立てませず汗顔の至りで御座います。現在私の頭の中に固く浸徹して居ります事は大日本帝國に生

いて今岡幹事の會計並びに事務報告、會長より本年度新幹事の指名あつて會食に移り、時局に相應しい總會氣分を満喫し午後九時半散會。因みに當日の出席者及本年度新幹事の通り。(幹事報)

出席者

來 賓 五十川直市元生

會 員 藤野、中江、朝倉、加藤、荒井(以上

直屬課)谷、三宅、今岡、齋藤(以上庶務部)山

本鎮、山本、寛、松島、友成、濱崎、尾久土(以

上經理部)織田、井尻、藤井(以上教育部)大森

藤野(以上社會部)多賀、幾島(以上土木部)冬

木、保健部)上尾(水道部)仁禮、大西、垣岡(以

上經濟部)小西、出口(灘區)池田、平野(葦合

區)皆川、井上、多田(神戸區)山本(寛)、荒井

湊東區)丸物、小南(湊區)石田、松田(林田

區)淺田(須磨區)

本年度幹事

朝倉(會計)、谷(庶務部)、山本鎮(經理部)、織田

教育部、飯田(社會部)、大西(經濟部)、多賀(土

木部、出口(灘區)、河原(葦合區)、多田(神戸區)

荒井(湊東區)、赤尾(兵庫區)、森(林田區)以上。

斯文會

昭和四年度文科卒業生よりなる斯文會では、本年を以て卒業後滿十年に相當する爲、記念の賀箋を張る心算の處、時局柄自肅して敬神、健康、親和と三意義を兼ねて六月四日舉行した。午前十時、三重、奈良、兵庫の各縣より駈せ参する會員を加へ京阪天六驛集合、塵押への雨に清掃された煙部をあとに高槻下車、久し

く病床の楠君を慰問、長期抗戦にしては比較的元氣な姿を見て安堵し、其れより青葉築れる櫻井驛址を訪ふ乃木東郷兩將軍の筆跡に大楠公を偲ぶこと一刻、次に後鳥羽上皇七百年祭に當り官幣大社に御昇格の水無瀧神宮に参拜、和歌に名高い水無瀧川を川鹿の聲に迎へられ山いちごを食み乍ら廻る。柳谷觀音に詣でそれより道を長岡天神に至り参拜、池畔の名亭錦水に宴陣を張り、久し振りの快氣焔にメイトルを擧げ解散したのが九時過ぎ。

参加者 和田、川内、神屋敷、吉田、浦島、丑田、安井、安川。

關大五縁會五月例会

關大五縁會(昭和五年大學部卒)は當に活躍し例会を開いてゐる。五月二十日(土曜)日本橋北詰ブルジル館にて五月例会を開いた。この會は一つのクラブとして社交團體となつてゐる。

當日参集者 西田順道、岩田浩太郎、稻村金藏、寺下勇、中石清一、島久四郎、御堂河内四市、鈴木武夫の諸氏。

會員消息

和田 義爲君(卯三〇) 法 東京市世田谷區成城町四六七(電碓五五七)に轉居

勝谷 武夫君(大二 專法) 尾道市役所産業課長を勤む

山内 朝登君(天三 專法) 日本生命京都支店より同福

岡支店へ轉勤、住所は福岡市春吉四番町七一〇

熊野 猛君(大八 專法) 大阪海上火災門司出張所より同廣島營業所へ轉勤、住所廣島市富士見町一ノ番

を享けたる喜びで御座居ます。報國と皆様の御期待に添ふべく一奮發する覺悟でございます。不在中よろしく御願申上ます。

中支にて 専門部教練 袋井榮太郎

着任してから殘兵の兎狩り見たいにあちこち馳け廻り通し、老骨四日分も五日分も米と糧詰を背負ひ込んで何十里行つても山また山、山に寝て山に暮れ、十日日の大〇夜も平氣でついで行く迫撃砲の彈幕もチエツコ輕機も何回あつたかわからぬエライ體驗だ、冷靜に考へる餘裕なんかない、只勤めるんだ、自分の良心の命するまゝに何でもやる、生死なんか全く運命だ、然し露營の夕べ大〇山脈の彼方夕日正に落ちんとする時誰か一片の懐郷の念……。思ひに耽る事もある、故郷からたよりのあると其日一日中朗かだ。

昭七專團 高津壯太郎

無事基地に於て精勵罷在候、何れ其裡には御期待に響ふべく宣撫報國の第一線に進出可致候、同志學友も五六名にとゞまらず心強き次第に御座候

滿ソ國境にて 専門部學生課 綾野進一郎

皆さん其後御元氣ですか、下つて小生軍務に精勵致し居ります故乍他事御休心下さい。扱今日皆さんより心こめた御慰問の品々を戴き嬉しく頂戴致しました。戦友と供に味ひました。當地も雪も解けて各小川が大河となつて解氷の塊がゴウ／＼と流れておます。滿洲の地面が、土、土、眞黒な土です、肥えた土は斯んなだらうと思はせられる位見事なものです。もう雪が除かれると、其の後にすぐ草花が芽又蕾を見せておます。もう一週間もすれば青々とした平野、

塩田 親雄君(天九 大法) 辯護士、名古屋市東區武平町四ノ一(一)電東五六〇)に轉居

仲井 朝君(天九 專法) 大阪府地方裁判所判事より神戸地方裁判所判事に轉任

福島 通夫君(天九 專法) 辯護士、事務所は天王寺區大道三ノ二(一)電天王寺二一九二)

伏谷吉兵衛君(天九 專法) 警部補に任じ、大阪府經濟保安課より會根崎署へ

玉置轉留雄君(天九 專法) 轉留男を照(ヒカル)に改む
新住所大阪府三島郡高槻町西五百住八五ノ一

大森庄三郎君(天九 專法) 大阪鐵道局を辭し社團法人兵庫縣工業會へ勤務、住所は神戸市林田區長樂町三ノ一三一

黒田 美男君(天九 專法) 滿洲國齊々哈爾市孟子路一號地に現住

北本彌一郎君(昭三 專法) 厚生省大阪職業紹介所より傷兵保護院に轉じ傷痍軍人福岡職業補導所に勤務
住所は小倉市片野木町四ノ七〇一

藤本 浩一君(昭二 專法) 大阪市四貫島商工青年學校教諭、興亞青年勤勞報國隊指導者として約三ヶ月滿洲洲に派遣出張さる。

小野 美敏君(昭三 專法) 南京攻撃戦に名譽の戦傷を受け堺金岡陸軍病院にて療養全快の上、大阪歩兵第八聯隊東澤部隊本部に勤務

三奈木勝平君(昭三 專法) 地名變更に依り住所は山口縣熊毛郡周南町島田三三〇八、勤務先周南町役場

川越 茂樹君(昭三 專法) 大阪府戎署を辭し北支特務機關に勤務、住所は潘區二條通四ノ三六

宮本 壽君(昭六 專法) 大阪府警部より内務省屬として内務省警保局保安課に轉任

大野 遠男君(昭七 專法) 豊中市岡町錦通三ノ四二五に移轉

喜多省三郎君(昭八 大法) 警部補中本署より大阪府警察部防空課に轉勤

安達 壽君(昭八 專法) 兵庫縣武庫郡瓦木村下瓦林豊年四七三へ移轉

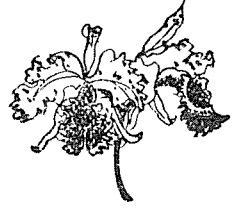
内山 勇君(昭八 專法) 佐賀毎日新聞社を辭し市立實業青年學校教諭となる、住所は佐賀市上多布施町高岸五六二

小西 登一君(昭九 專法) 堺市西水山園に轉居
近藤 盛雄君(昭九 專法) 大阪製鎖造機會社を辭し藤田機械製作所(港區南境川町二ノ二八)に勤務

泉本 正隆君(昭一 大法) 網島署より府警察部防空課に轉勤

森田 彦一君(昭一 大法) 滿洲炭鐵會社經理部より同復州炭鐵經理係(奉天省復縣)へ轉勤

高級田畜專門



二十段家畜

大阪府大阪市東區堂前御筋筋入
電話四七三三

山々が見られる事と思ひます。夜等、つい二三週間前にはペーチカに(ストロブの親玉)ガンガン火を焚いてゐるのに此頃は夜ねむれぬ位熱いです。

窓を開け放つて涼風を味ふ位です。蛙がなくなつて驚かされます。近頃は勤務も多忙で體が二つ位要る位です。(下略)

流丸豊かな黒龍江の 河の岸邊は我家

昭三 專法 吉田 三郎

上陸以來至極壯健にて〇〇に於て奮闘して居ります御安心下さい。内地は今翠したる新緑でせう。當地は既に盛夏の暑さが訪れて皆んな顔と云はず手と云はず黒くなり文字通り黒ん坊です。幾多の戦闘で人間の力の偉大さをつくつく、體驗いたしました、今日も之れから〇〇方面に討伐に参ります。

〇〇病院にて 專三 在學 塚 豊

前略小生儀去る五月二日逆襲の敵を交戦中の處、計らずも武運拙なく背部に貫通銃創を受け、目下入院加療中、幸ひ經過良好なるも身體自由、不如意、仰臥致して居ります。先般御書面を載き御返信仕る暇もなく此仕末にて何卒不慮御了承被下度、尙教職員各位へもよろしく御風聲賜度候

專三 在學 津田 正男

全くの御無音、申譯けもありませぬ。やつと最近第一線に参りました。元氣にやつてゐます。現地といふものは内地で想像し或は傳へられてゐるより想像外の事が多いです。大阪の兵隊は何とか云はれますが、我々の部隊の将兵は頗る勇敢積極的で立派

西川 儀貞君(昭一〇專一法) 大阪中央郵便局を辭し滿洲重工業に屬する同和自動車工業會社に入社、住所は奉天市大和區協和街五段四七同和社宅

吉木 正君(昭一〇專一法) 滿洲電々會社哈爾濱管理局放送課(哈爾濱南崗醫院街四二)に勤務

谷村 修君(昭一〇專一法) 滿洲國地籍整理局懷德縣支局より同長春縣支局、新京特別市順天區西長春大街)へ轉勤

菅原 龍雄君(昭一〇專一法) 警部補、轉署より守日警へ轉任

甲斐 龜夫君(昭一〇專一法) 松下電器貿易株式會社に入社

大矢 重晴君(昭一二專一法) 陸軍省兵務局防衛課勤務

住所東京市澁橋區西大久保一ノ五〇八、融樂莊成田 博君(昭一二專一法) 名古屋市産業部市場課より同商工課へ轉任、住所は愛知縣清洲町一場

森 喜志雄君(昭一二專一法) 歩兵第八聯隊陸軍歩兵少尉、北野中學校配屬將校として勤務、住所旭區生江町四八八

◇

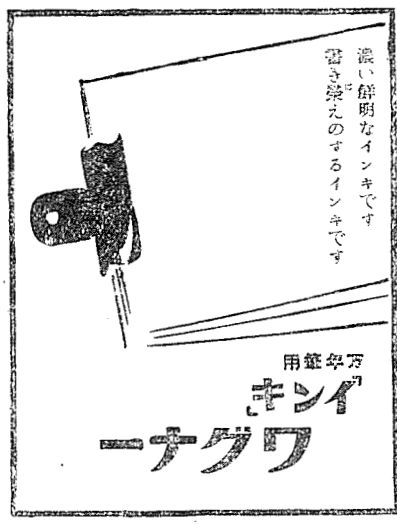
徳久登美路君(昭一二專一法) 京城稅務監督局勤務、住所京城府黃金町二ノ六五、草野方

祐保 吉次君(昭一二專一法) 兵庫縣御影署より三宮署警務係に轉勤

長尾 勇君(昭一二專一法) 長尾を山田に改姓

正岡 則之君(昭一二專一法) 東成區北生野町二ノ九〇に轉居

大田 三男君(昭一二專一法) 東京市豊島區堀ノ内に移轉



和田雄次郎君(昭一二專一法) 西川ブラザース大阪支店より東京支店(銀座二ノ三)に轉勤

吉田 菊雄君(昭一二專一法) 松下乾電池會社東京支店在勤、住所は東京市品川區大井水二二二二、小出ハウス内

阿部 英彦君(昭一二專一法) 大阪市立櫻宮商工青年學校教諭となる、住所北區東野田町一ノ九〇、櫻宮アパート

松浦 正男君(昭一二專一法) 精當園を辭し兵庫縣柏原農商青年學校教諭となる、住所多紀郡城北村郡家

澤田利三郎君(昭一二專一法) 澤田を田中に改姓

井上 成章君(昭一二專一法) 東京市中野區小籠町八、窪田歐猪方へ轉居

水野 秀雄君(昭一二專一法) 井上電機製作所(京都市外向日町驛前)に轉勤

喜見 實君(昭一二專一法) 大阪市旭區關目町二ノ四〇、石井秀夫方へ移轉

に任務を果してゐます。諸先生方へも御ついでの折によろしくお徳へ願ひます。

喜一法一在學 原 豊

綠濃き風薫る初夏も訪れて参りました事でせう。其後承らく御無沙汰致して居りますが皆様方には御變り御座居ませんか、昨日は學報を御送り下さいまして有難う御座居ました。我等は此の餘夜の皆様方の無限の御後援に對しては只々感激、感謝の外なく今や大陸に黎明が訪れ、東亞新秩序建設の任務遂行邁進に一層の努力を促してゐます。降つて私は相變らず元氣一杯南支最前線にて御等公致して居りますすら何卒御休心下さい。當地は最早や雨季に入り、平和を樂しむ農夫は水牛を追つて田を鋤いて田植をし又内地の源氏螢より大きな螢が飛び廻つて、南支はすっかり夏の情緒です

喜一法一在學 宮 本 豊

長らく御無沙汰して居ります。南京は大變暑く、昨日などは九十度と云つた位でした。玄武湖や漢慈湖の楊柳は花が散り果て、唯暑い風が流れてゐるばかり俳句をと思ひ乍ら何も出来ずに軍務に勵んで居ります四月の學報を昨日受取りました。なつかしいひとへきをアラタナスの窓邊で過す事が出来ず。

喜一法一在學 下 條 秋 男

適日御惠送に預りました學報により忠魂碑建立の議あるを知りたく感激致しましたが、何分討伐間のことゝ野渡郵便局の便悪しく遂に今日迄其意を得ませんでした。漸く本目思ひがけない幸便がありました故蓋だ僅少な金額却つて御面倒かとも考へましたが亡き勇士へのたむけの微衷、別村金五郎御送金致しました故建立費の一端にでも御加へを得ば皆甚に存じます

千里山法律學會

五月十八日新入會員を迎へて春季總會を心齋橋ドンバルに於て開く。會長中谷先生を囑んで懇談に花が咲き眞學なる學徒の會合としての自覺の下に終始し從つて稀に見る嚴肅裡に會員一同は明日への精進を誓つた。

席上本會特別會員にして應召中の諸先輩の武運長久を祈り、出席者一同は日の丸に寄書をして此等諸兄に送つた。

當日出席の特別會員左の如し

大關親太郎君、松芝修君、藤植福雄君、山下重彦君、飯尾勘次郎君、内田修君

一新學年度を迎へて本會は豫定の如く毎週例會を開催し會員相互に熱烈なる討論を行つてゐる。

特に五月二十五日の例會は會長中谷先生御出席の下に第十四教室に於て午後四時より開會、席上晴の御親閱參加の光榮に浴した會員下田資郎、川上献三、上山晃の三君より親しく御親閱に參加した實感を聴き出席者一同眼前に盛儀を拜するが如き感に打たれ六時過ぎに至りやうやう散會した。

聖戰三年、東亞建設・東亞新秩序の確立に對處すべき法規は複雑多岐に亘り第七十四議會を通過した法律のみにても實に八十九件を算へるに至つた。従つて法律學を修めつゝある學徒は常に此時代の推移に着目し研究練習を重ねなければならぬ。

今や法律學を修むる學徒に課せられた責務は重大である。我千里山法律學會は此責務を充分認識しつゝ、本學建學精神に則り、人格の陶冶に勵み本學建學の精神を發揚せん事を期してゐるが、之が目的の達成は一に學生諸賢の熱意ある協力如何に依存してゐる。眞理の探究と理念の追求に精進しつゝある學生諸兄の入會を切望して止まない。(五、二九、記)

東亞研究會 (學部)

聖戰二に三年、今や我軍の戰果着々と擧り東亞の天地には明るい希望が芽生えて來た。亞細亞民族の大亞細亞へ、大東洋の轉換期は今大きくカーブを描かんとして居る。しかれども輝かしい理想の實現の前途には幾多の難關が横たわつて居る、世人一度口を開けば大言壯語以て

亞細亞問題を東亞協同體の結成を論ず、吾人は須く言ふ前に研究せよ今ぞ實行の時は來れり、東亞研究會はこの幾多の問題に忠實なるメスを振ふ學徒の集りである。青葉若葉馨る五月二十九日、新會長西村先生及與平先生及商大學生の御來場を頂き集ふ者二十、お互に強い意志と宏遠なる理想の下に大東亞建設の礎たらんとちかつた。今年は行事も華々しく殊に大阪商大滿支研究會と手を握り眞誠に努力せんとす。此時に際し東亞に關心を有する學生諸兄奮つて入會されよ。お互に此の學生々活を東亞研究に有意義に用ひ大陸に飛躍し以て我關大學國の名譽を高めることに努力し合はうではないか。

東亞研究會 (專門部)

五月三日(水曜日)午後六時より心齋橋森水キャンデーに於て新入生歡迎會を開催、午後八時三十分散會す。

五月二十六日午後三時より三十九教室に於て討論會開催す。演題は左の通り。

一、滿洲移民について 商二 楠崎 優

一、華僑生活について 商二 中井政徳

五月二十九日學部專門部合同懇談會を天五ヶ光々にて午後六時より開催す、新任會長西村及び與平兩先生の出席を得有る益なる訓話有り、盛會裡に終る。

商業研究會

五月十九日、二十年の長き歴史を有し關西の咖啡工場を代表するダイヤモンド咖啡工場を見學す。我々が日頃唯漠然と欲むぶの新興商品たる咖啡の歴史概念、或は實地にその製造過程を懇切に説明して頂き又歡待を受け有意義にこの見學を終つた。出席會員三十名

五月二十九日、心齋橋筋明治製菓に於て、午後六時より新入生歡迎會を開催せし所、會長森川先生を始め多數の先輩の列席を得、全會員の出席の下に和氣藹々盛且大に舉行された。出席者四十名 尙近く會員相互の親睦を計る爲、ハイキングを擧行の豫定 (小松原記)

經 友 會

學究的良心の結合として經濟學に對する研究と經濟學科内の親睦と云ふ二つの目的に依つて生れ出た經友會も、第三年度に入り從來の經驗と事變下學生の本分に適せんとする熱心たる學說意識に訴へて多望なる事業のスタートを切つた。四月二十七日、學内に於て四月研究例會を「戰時體制下に於ける國民經濟生活を論ず」の題目の下に行つた。此の會は從來も熱心に指導と批判を與へられてこられて中川教授に列席して頂き、會員の

研究發表と共に對する質問討論に當ながらの眞學なる研究を展開した。研究發表者余島君、石井君は此の問題に非常な熱意で以つて究明につき進んだだけであつて其の發表も非難のないものであつた。午然何分午後八時より開始したる爲に、時間の餘裕に乏しく充分なる論争を爲し得ず徹底的究明を後日に殘さねばならなかつた事は誠に残念であつたが其れも各會員の自由研究に待つとすれば尙且意義あるものとしなければならぬ。

次に本會の昭和十四年度事業方針として委員會に於いて左記事項を決定してあるが、學友會が本年始めて經友會の眞價を認めて特別豫算に壹百圓を計上したる事は本會の將來の發展の爲又學友會の革新の爲慶賀すべき事である。

一、會誌經國濟民の創刊

一、毎月一回研究例會の開催

一、見學を兼ねハイキング大會を行ふ

一、他の研究團體との討論

一、講演會の開催

事業方針は上記の如くであるが會長に本學々長神戸正雄先生を頂く事は一段と我々に緊張と奮闘を促し今後の躍進は期して待つべきである。

國語漢文學會

昭和十四年度總會は五月七日午前十時

より天六學會に於て開催した。飯田會長高橋、安川、田中の諸先生外會する者三十名、會長飯田教授の挨拶の後、昭和十三年度事業並に會計報告ありて協議に入り、本年度事業等につき討議して十一時半總會終了、ついで藤本浩一氏の「支那事變と日本詩壇」なる題下に一時間に亘り平素の蘊蓄を傾けられた研究報告ありて後、午餐を共にしつゝ意見の交換を行ひ午後二時半散會した。

尙五月十九日(金)午後七時より在學會員例會を催し、飯田、高橋、田中諸先生出席された。

尙本年度幹事氏名左に掲ぐ。○印當任在學幹事 ○紙谷久善、八木殿、上中道六(三年)、吉澤義竹、○田中勝次、宇野正邦(二年)、○西村博、吉田眞善、中野省一(一年)

吉水登、○藤本浩一、平林澆治、多治見眞孝、藤井兵藏、藤井眞藏、○神屋敷民藏、安井章吾、谷口利治、村井富男、村上泰明、黒野文雄、東川甚之資、竹本寛隆、三木重雄、中川多喜藏、荒木隆郎、佐々木卯平、宮内大三郎、吉崎茂藏、友田徳太郎、坂口兵司、吉田孝介、小西正夫、二階堂博、前野忠道、三宅定一、監田武雄、澤田雅好、北村學、溝田雅尚

白鷺會(美術部・學部)

新御歸朝の村田敷之亮先生を迎へて、五月十七日午後六時半より心齋橋ドンパルに於いて白鷺會主催にて歓迎會を開催した。

會する者、會員の外十七名の同好の士相集り來つて、盛大、會長田邊信太郎先生の開會の辭あつて、幹事經三、蜂谷の挨拶にて、西洋美術に對する御造詣深き村田先生のギリシヤを中心としたる美術、彫刻に於ける濕氣、光、影との關係、全べてに太陽の下惠ぐまれたギリシヤの風景は雨曇の少き事とに依つて、自然美と人工美との調和がある。アトロポリスは一塊の大埋石山にして、其の上大理石のパルテノンの神殿が丸彫に彫り抜いた様に

千里山新聞部

十四段制實施へ

關西學生ジャーナリズム界に於て京都帝大新聞に伍して斯界に君臨してある千里山學友會發行「關西大學新聞」は今春編輯、庶務部門に中樞を爲せる山川(現在旭硝石株式會社)、松尾(現在大阪鐵道局)、橋本(現在京都市役所)の三君を

立つて、柱の幾本かは倒れ屋根は落ちて雪白の丸柱の間から透し見るギリシヤの空はあくまで朗かに此上なく美しく、エギナ誇から吹き上げる風が自由に宮殿を通り抜け丸柱に撞けづられて、洗練されたシンメトリーを感じ、時と無残な人の手がすべての色彩を拭ひ取り、裝飾を奪ひ去つて却へつて、ドリヤ柱の堂々たる力の美を剥ぎ出した均齊の美、年代を測るに暗示的に内に籠る趣が深いとの村田先生のお話は、吾々をして、ギリシヤ懐古の情深く、亂れ横はるドリヤ柱への聯想に咽せ返る様な藝術論に快味の横溢障惹たらしむものがあつた。最後に幻燈に依る實際感に近き映寫があつて、お互に時の過ぐるの早きを惜しみつゝ十時閉會した。(經三、蜂谷記)

社會へ送り出し、大痛手を蒙つたが部長賀來教授の懇切な指導と先輩の後援に、安田總務、稻森副總務以下ガツツリとスクラムを構成徐々に充實への一歩を進めて來たが、今春新入生の多數入部と共に舊部員の蹶起となり、先輩の殘した事業の實現に努力しつゝあるが、今度其の一つの現れとして十四段制を確立した事は折柄の物價統制に即應するものとして一應注目してよからう。

皇陵崇敬會例會 (學部)

五月廿一日新學期最初の例會は吉野の後醍醐塔尾陵參拜及び南朝史蹟探訪として催す。

此の日雲低く五月下旬と云ふに吹く風も肌冷たく感じる、大鐵電車に揺られること二時間に垂々と吉野神宮前に下車したのは正午に近かつた。直ちに徒歩で吉野神宮に參拜す。此の社は明治廿二年の創建で御祭神は後醍醐天皇である此處を辭して垣々たる道を行くことしばらくにして右手に南朝の忠臣村上義光公の墓所を拜す。墓は寶篋印塔で松楸の茂る丘上に在る。元弘三年、護良親王敗軍の際親王の身代りとなり自刃したことは餘りにも名高い。墓に詣で更に行く、村上公の墓所を去ること約二百米南、照憲皇太后御野立所を左手に見て行けば聽て吉野驛への三叉路に出る。此の所で蠶食を終へ愈々目的地御陵迄約三軒の起伏の多い山道を行く、此の頃今迄幾重にも重なり被ふて居た黒雲はいつしか拭ひ去られた様に消えて擦々たる五月の光は吾々に注ぐ、如意輪寺の裏手に在す、後醍醐天皇陵に參拜し南朝の昔を偲んだのは午後二時頃であつた。此の御陵は圓墳で北面し内外二重の石柵に圍繞せられてあるその昔、天皇は延元四年御治世廿二年に

して吉野の皇居に崩し給ひ群臣遺命を奉じ服御を改めず棺槨を厚くして此の地に葬り奉つたと聞く、御陵城内に、後龜山天皇皇子世泰親王の御墓がある。

來た道を戻りは其處此處と由緒ある社寺を訪れる、即ち如意輪寺をはじめとして山口神社、大日寺、吉水神社、藏玉堂等を巡拜して本行程の豫定を全部終へ吉野驛に到着したのは三時十五分であつた
參加者 石田、濱田、尾崎、安藤、金重、牧野、荒木の諸君

參 陵 會 (專門部)

五月十一日(木曜日) 新入生歡迎會
心齋橋明治に於て午後六時より開催す
平尾會長、河村信一先生並びに先聲諸氏
の多數御出席を得盛大且つ有意義に和氣
霽々裡に幕閉づ時に午後九時。出席者二十五名。

五月廿八日(日曜日) 第三次第九回例會
京都、嵐山、水尾方面に舉行す、一行
午前八時半、天六新築阪に集合河村信一
先生も、國防服に巻脚絆、リュックサツ
クにステッキと云ふ風流たる出で立ちで
御參加下さる。當日は日曜日の事とて車
中は出盛のハイカーに依つて占められて
居た、嵐山に下車せる一行は電車にて鳥
居木に出で、清和天皇陵に向ふ。
一段と激さをましまがりがりくねつた山

道、はるか下方の保津川、それを上下する小船に色とりどりのパツソルの花が樹木のおひまあひまにちらほら見える。後龜山天皇陵參拜後、河村信一先生より種々御話を承はり嵐山驛前で解散したのは午後三時半であつた。參加者十四名

本日參拜陵次の如し。
第五十六代 清和天皇(水尾山陵)
第八十八代 後醍醐天皇(嵯峨南陵)
第九十代 龜山天皇(龜山陵)
第九十九代 後龜山天皇(嵯峨小倉陵)

基督教青年會 (二部)

ペンテコステも過ぎ夏を迎へました。私達の二部 Y.M.C.A. は毎月一回集會し禮拜と交誼を致して居ります。先月は十九日午後八時から正門前の難波様の二階を提供して貰ひ長谷川牧師より教會史を教へられました。今月は七日水曜日ですが前同様で集會を持ちます。

又私共各自で薄信徒ですが御恩寵を感謝 イエスのキリストなる事を立證しあつておます。本學に基督教者は何かの使命がある筈です。靈肉共に貧しい私共ですが同僚の友よ兄弟よ碎けた心で主の御名に於て一致し互に勵ましあひ信仰を深め交り度ひと思ひます。
會員村林長次君 函三一は五月二十九

日恩召入隊しました。通信によると早速征途に上るさうです。兄の上に信仰の友は特に祈り度いと思ひます。兄は熱心なキリストの兵士でした、私共は二十五日西教育で壯行を祝ひました。

要する學園の同僚の友よ、又求められ方よ、私達は待つておます。K.H.生「幸福なるかな心の貧しき者天國はその人のものなり。」 マタイ福音三節

關 甲 會 (專門部)

去る五月八日(月)夜專門部一部在學生中關西甲種商業學校出身者にて組織せる關西大學關甲會本年度新入生歡迎會を天六荒鷲にて開催した。午後七時開會自己紹介の後夕食に移り各自母校の想ひ出に本學入學の抱負に就いて親密なる放談をなし、記念撮影の後午後十時關大關甲會の前途を祝して萬歳三唱、校歌・學歌を高唱して意義ある一夕を和氣霽々裡に過した。

本會の目的は會員相互の親睦と融和を計り關西大學と關西甲種商業學校の連絡を密にし以て關西大學々生としての互助且素質向上の先鞭とならん事を目的とし現在會員は三年生九名、二年生十一名、一年生十四名で計三十四名の會員を擁し、名譽會長には現關西甲種商業學校長の小泉善治先生を推戴してある。

關大スポーツ...

庭球部 (専門部二部)

千里山馬術部

◆甲子園國際庭球部主催、大阪朝日新聞社後援の第二回早起庭球大會

五月一日より十日間毎朝六時より同俱樂部コートに於て舉行された。

十日間成績は本學小島君は九勝一敗惜しくも優勝を逸し、西本君は六勝四敗で共に皆勲賞授與さる。

◆ナインボール庭球大會に出場

五月十四日午前九時半於南海沿線中百舌鳥コート

三回戦 西本(關) 4-0 山口(農)

準々決勝戦 西本(關) 1-4 田賀(住)

◆第一回全國庭球大會

大阪庭球俱樂部主催、日本庭球聯盟後援にて五月二十一日中百舌鳥コートに於て開催され、本學小島北川組は準々決勝戦に於て神戸山手岡本大谷組に惜敗した

一回戦 小島(關) 5-3 草間(鐘)

二回戦 小島(關) 4-2 橋本(都)

三回戦 小島(關) 5-3 渡邊(大)

準々決勝 小島(關) 2-4 阿本(神)

○五月廿七日(土)園田馬術講習所に於て前西關西爭競優勝者大阪商大と前回全關西大會覇者本學との對抗戦を舉行終始熱戦裡に試合を續け本學選手よく強敵を撃破せるも新進豫科森本選手不運の失格に惜しくも長蛇を逸す。成績左の通り(障礙飛越減點法)

關大 (馬名) 大商大(馬名)

○齋藤 -5 (速飛) -15 揖

○岡村 -8 (福包) -25 羽野

○安藤 -10 (準) -54 大原

廣谷 -0 (扇羽) -0 川村

森本 -74 (賀雲) -0 田中

合計 -97 -94

○第十一回全日本學生馬術選手權大會關西代表選拔大會及第二回全關西學生馬術選手權大會豫選は六月四日堺騎兵第四聯隊にて開催、本學より廣谷主將、安藤齋藤之に参加し廣谷第二位にて全日本選手權大會關西代表に選拔され同時に關西選手權出場資格獲得。安藤、齋藤兩選手何れも豫選をパスし同じく關西選手權出場権を獲得す。

射撃部 (専門部)

◆去る四月昭和十四年度の輝しきスタートを切れる我が部は新部員十二名を算し

傳統の歴史を誇る底知ぬ力強さを示す上に篤行嚴格なる西本大佐殿を顧問とし

新部長に山本先生を戴く。

時局柄射場の使用七月迄意の如くならず實砲練習は非常に其の回数を減少されしにも拘はらず去る五月七日の國民射撃大會にては岩本主將の四十二點をトップ

に入賞者を出し好成績にて其の名を擧げ

又五月十二日の三年生學校射撃に於ける射撃部々員の成績は最上にして平素汗と

油の練習に依る技術の優秀さを示す。

(木村)

射撃使用不許可に依り春季對抗戦スケジュールに左記の變更有り。

スケジュール (射場名)

六月四日 三支部對抗決勝戦(東京)

同日 春季合宿開始(京都)

同日 京都射場・深草射場

同日 立命大定期戦

同日 全日本學生聯盟關西支部大會

同日 合宿終了

七月下旬 夏季合宿(京都、大津)

中甸 京大主催全國高專大會

同 東部遠征

同 明治大學定期戦

同 早大 同

同 東大主催全國高專大會

なほ右の期間中隨時大阪商大、大阪外語關西學院との定期戦を行ふものとす。

◆去る五月二十八日我部は京都射撃場に於ける、全日本學生射撃聯盟三支部對抗戦第一次、第二次豫選に出場す。

第一次豫選に青山、北原の二君はパスし午後より第二次豫選に移り西風強く銃動搖激しき中に青山君よく頑張り堂々第一位に以て入選し東部に於ける三支部對抗戦關西側代表として出場する事となる

(高崎)

高幹部員の一部左の通り變更す

主 將 岩本 正晴

マネージャー 高崎 續

會計 碓 久雄

彈 藥 係 西田 通雄

二年委員 木村 一郎

弓道部 (千里山)

對高野山大學第一回定期戦

五月十三日午後一時 於本學道場

高野山大學58-54本 學

關西學生弓道聯盟

五月十四日午後九時 於大阪南大道場

第二部成績 第一位 高野山大學 83中

第二位 天理外語 71中

第三位 浪速高校 63中

第四位 本學 62中

第五位 大阪外語 44中

ホツケイ部

關大連勝す 於春季關西學生リーグ戦

試合成績

五月十四日

關大 0 0 0 0 京大 於京大

同 二十一日

關大 1 0 0 0 三高 於關大

同 二十七日

關大 4 3 1 1 1 神商大 於神大

結局關大は二勝一引分で連続制覇す。

卓球部 (専門部二部)

全關西學生卓球聯盟春季チーム殿堂々優勝の榮冠を獲得す。

五月十四日 於大阪南科大學

第一回戦

本學 7 0 大阪商大

第二回戦

本學 6 1 和歌山高商

第三回戦

本學 6 1 大阪高校

優勝戦

本學 5 1 大阪齒科醫專

山岳部

五月十二日、春季登山を當日より三日間に亘り伊吹山に決行。十二日午前十時七分大阪驛出發。近江長岡驛着一時五分雨激しき中を二班に分れて出發、一班の先行隊四時半一合目に於てテントを張り準備全く整ふ。二班の後續隊五時半同地到着。同夜同地に於てベースキャンプを爲す。雨益々強し。

明くれば十三日早朝頂上に向つて出發七轉八起賀に想像以上の泥道、されど意氣益々軒昂たり。六合目到着十二時二十分。人無き山小屋にて餐食、一時出發。七合目過ぐる頃雪溪を見る。雨一向に止むの見込なし。登山踏みな川にして、思はぬ時間をとられた。三時頂上到着測候所に於て小憩をたのみそれより東の臺上に於て東方に向つて皇居遙拜並びに皇軍の武運長久を祈り、再び測候所に於て小憩の後下山にかゝる。

近江長岡驛着七時、大阪着十時五十分參加者——寺島、田中、吉田、村上、深澤、井手、高橋、川端、米澤、松村

五月二十七日午後七時より京都圓山公園内音楽堂に於て舉行せられたる『全關西學生軍對アマチュアクラブ軍拳闘對抗戦』へ本學より左記五名の精銳選手を送り、血戦激闘して學生軍の爲、萬丈の

氣を吐く。その結果、前半輕量戦に於て壓され勝ちの學生軍は後半戦に入るや俄然、山田、高木等本學選手の奮戦に依り見事四・五對、四・五の對スコアまで漕ぎ付けて終了した。

山田、高木等の奮闘は激賞に値する。——本學選手の戦績——(上が勝ち) フライ級

吉本(關大) 引分金 (アジア) 石川(CYM) 判定 森川(關大) パンナム級

金(アジ) 判定 和田(關大) フェザー級 山田(關大) 判定 元山(京拳) ライト級 高木(關大) 判定 愈 (京拳) (MY生)

自動車部

三月十一日—十三日 トヨタ自動車工場見学、熱田神宮参拜、名古屋陸軍病院訪問のプランにて参加者五名、部車(オールズモビル)車を駈つて名古屋方向ドライブす。

時局柄とて残念ながらトヨタ工場の見學は許れず、名古屋陸軍病院を訪問し野田軍醫中佐殿の案内を受け、時局に對する認識を更に深め、重病兵に對して花籠を捧げて無事歸學す。

五月二十一日 天候にめぐまれて新入

部員歡迎ドライブを奈良に樂しき一日を過す。参加車は先登中山、早助、松本三氏新入部員七名を加へて全員十九名。使用車三十八年式シボレーセダン三臺 三十四年オールズモビル(部車)一臺

五月二十六日 部員を三班にわけ阪神國道(野田)、京阪國道(守口)、阿部野街道(大磯附近)にて午前中二時間、午後二時間の自動車交通量調査を行った。

六月二日(金) 部員一同十七名部長中川教授の参加の下に大正區鶴町に偉容を誇る日本G・M自動車社を參觀する。戦時下に於ける外國系會社として國策的許可會社たる日産自動車會社、豊田自動車工業會社の著るしい發展途にある時とて去年度より幾分の淋しさが其の勇壯なるべき組立のリズムの中に感じられた。堀井サービス保障の案内に下の廣大なる分業制度の工場の見學し、パーツに、シヤンに、エンジン及びボデーに知識を充滿させて歸學す。

七月二十日—八月十九日(二ヶ月間) トヨタ自動車學母工場完成記念として同社では各大學自動車部より代表者二名を招待し、サービスの講習を行ふ、本學自動車部にも大石君、久光君を派遣する事になり學生自動車界もようやく國産自動車工業の隆昌と共に認識の度を深められ活潑になりつゝある。

校友會費拂込者氏名

(其の五)

昭和十四、五、六年度會費

山下 正夫

昭和十四、五年度會費

橋本 喜作 鷲見 孝雄

昭和十四年度會費

三原 景	須藤 榮一	葛田 博史	西山 太郎	大原伊兵衛	山根 素弘	梅田 太郎	安井 昌一	森塚 圭城	樋口恒三郎	倉木 善夫	岩村 徹男
戸部 智夫	田中 誠逸	中村 光信	香月 芳久	淺野 政雄	石川 滋夫	中村 彦一	西森 正雄	池田 忠雄	金丸 義郎	稻若 博	井上 貞雄
高野辰一郎	荒川卯之助	高木 善男	安田 正治	服部 靜彦	澤田 富治	阪井 和雄	雀部 貞	山口 孟	室山宇太郎	田村 光嘉	讀名慶次郎
北村勝三郎	飯田 正典	甲斐 龜夫	臨本 三鹿	高畑 孝平	井阪 清	團尾 得三	山村 義房	原口 孟	小崎 司郎	服部 覺助	田口 金二
野口 貞夫	檀 重雄	長嶋 敬三	下野英三郎	三宅 凡夫	山崎 勝	利國 清信	西川 一行	井上 欣助	泉 義三	井上 常幸	白髮 茂
伊原 友浩	喜多村重光	川崎 武雄	神田 孝助	坂本 龍夫	御前 義夫	井田 安二	辻 忠勝	古田吉五郎	伊藤 玉光	山下 明	榎田 弘
安田 昇	桂 修一	高見 明夫	吉田 朝彦	黒川 重三	片岡 寛	末廣 昇	久野 耕市	大森 清	德光 呷作	吉村 種藏	藤井 保
田中 俊雄	中野 正喜	勢川 清郎	毛谷村元治	福田 曉	渡邊 定市	佐藤 敏	三宅 豐之	藤井 義成	小笠原延彌	菊池 勳	山本 利治
都志 辰雄	岡田 瀧次	田中 耕一	山中 保一	石川 昌一	栗山 茂	梅田 茂	栗本 義重	谷口 賢治	小畑 登	松本芳太郎	佐野 年彦
辻 孝義	小森 石藏	山中 木太	高 龍 混	岡本 理一	岸本 正直	鹿村 英允	伊 東 寅	安井 立雄	中川喜久造	神崎傳次郎	山中 信夫
幸田 貞明	大谷 朔	村井悦太郎	富野 勝彦	諫山 征二	三島多喜雄	小田 威夫	松原政次郎	野口 卯吉	坂上 芳雄	久保田達二	八田 信夫
造道 富雄	嶋井 義秀	時水 重雄	猪又 賢治	御堂河内四市	望月 明憲	藤谷政之助	丹農 靖信	橋口 勳夫	川島 弘行	丸木利喜造	番匠 武雄
石井 福一	四辻 厚躬	上原 三郎	北村 泰之	澤井吉之助	森川 太郎	關山 藤雄	江上 春雄	村岡 俊三	北岡 醇平	富田 貞男	小曳 陽市
松宮 康雄	北山 久雄	橋本 武男	松井 正男	丹羽 英夫	田中 健三	瀧尻捨治郎	植田 重正	小林 稔	櫻木 一雄	富田 貞男	
赤堀 一男	米津 毅一	田中 正男	津田 元吉	星子 末雄	一海 景宥	仲野 富祥	伊東 眞造	齋藤 正美			
渡邊 壬	中井 正王	中野 具武	盛岡 照熙	多治見眞孝	濱田 喜一	山田 泰三	井上 仲治	廣野 完			
山口 正信	村上 順	石本 勤	大岡 一男	中村武一郎	浦本 哲彦	石躰 重之	館 多雄	吉川 重殿			
峯元鍊太郎	鎌田 豊久	松井 昇三	今井 良造	辻 敷文	栗原悦治郎	西本 寛一	伊原 利秋	山崎林太郎			
天野 喜富	岡本奈良玉吉	藤岡 健三	加味根養三	柴山 大亮	大崎万太郎	松山 藤雄	朝田 良一	吉木 由雄			
義元 繁	兵頭 勇	高島賛太郎	藤塚 喜治	小田切 西	阪口 芳治	小林儀三郎	三田村琢美	福田 寧			
				中井三之助	加藤 清	古市賢太郎	波田野福雄	依藤 繁夫			
				中島 常雄	前田 瀧造	田中 則親	藤井梅太郎	川涯 莊市			
				名倉 熊藏	米谷 清志	高谷 幸吉	黒田 一男	富永 竹夫			
				山村 松廣	村尾 靜明	前田 研吉	大村 喜覺	宮本 盛雄			
				戸臺巳之助	鈴木 武夫	岡本庄之進	江田 重雄	(以下次號)			

大正十一年七月十五日創刊
 昭和十四年六月十日印刷
 昭和十四年六月十五日發行

編輯人 神屋敷 民藏

印刷所 谷口印刷所

發行所 關西大學學報局

關西大學

千里山學舎 大阪 市外千里山
 電話 吹田一四六一
 本館電話 吹田一四六一
 大阪市東淀川區長柄中道
 電話 吹田一四六一

大阪商科大学 助教授 竹中龍雄 著

最新刊

日本公企業成立史

菊 判 上 製
二 七 〇 頁
定 價 貳 圓 貳 拾 錢
送 料 拾 四 錢

大阪商科大学 經濟學部 調查彙報 第四十輯

本書は市制町村制發布五十周年記念出版物であり、公企業研究の權威たる著者が、多年の蘊蓄を傾けて我が市制の實際の運用の跡を公企業を通じて検討すると同時に、上下水道、瓦斯、電氣、軌道、港灣、運河、屎尿處理事業に就いて史的實證的研究をなせる力作である。著者はこれによつて我が一般市政、大阪市政並に公企業發達史の研究に新天地を開拓してゐる。地方自治政、公企業、公益企業發達史に關心を有する者は勿論、社會經濟史、政治史研究者の一讀を奨める。市政に直接關與せる者はいふに及ばず、苟も我が都市行政の刷新を論ずる人士は先づ本書を繙かれよ

【目 次】

序文 緒言―地方自治體としての市の成立―近代的城市―水道企業の成立 市營港灣事業の成立―市營市街電車企業の成立 市營電氣供給企業の成立 市營瓦斯企業の成立 市營運河事業の成立 市營企業特別會計制度の成立―明治四十四年の市制の改正と市營企業―故郷原大阪市長の市營企業政策 結語

（附 録）明治初年の私營水道事業とその統制 市營下水道事業の成立 市營屎尿處理事業の成立

大 同 書 院

振替電話 東京 八二二二 田 前學大中央臺河駿京東替振
番八三二一八 番八二二二

大 阪 替 電 話 北 區 梅 田 新 道
番 番 番 番 番 番
一 三 一 五 一 六 七 九 一 五 七 三 二